JAAGA だより

日米エアフォース友好協会
Japan-America Air Force Goodwill Association

発行：日米エアフォース友好協会
〒160-0002
東京都新宿区四谷坂町９番７号
ZEEKS 四谷坂町ビル 3F
編集：JAAGA 事務局
印刷：東伸社
ホームページ：http://www.jaaga.jp/

～ JAAGA 会員の皆様へ～　齊藤治和会長 挨拶
Greeting from Gen (Ret.) Harukazu Saitoh, President of JAAGA

会員の皆様こんにちは。新型コロナ禍の毎日、ご家族の皆様共々お元気でお過ごしでしょうか。

令和の時代が明けて１年が過ぎました。

桜咲く下での花見の宴も、新緑と新たな芽吹きの下を歩く新入生や新社会人達の若々しい姿を見ることも、全て今年は叶いませんでした。

JAAGA におきましても、本年２月頃からは当初予定していた各種行事等への参加も断念せざるを得なくなり、今現在においても業務実施の見通しが得にくい状態にあることは誠に残念であると共に、この新型コロナウイルスという厄介な「くせ者」への憤りを禁じ得ません。

先般、会員の皆様にお伝えした様に、例年実施していた JAAGA 総会及び関連して計画していた一連の行事もその実施のあり方を大幅に変更し、先日、会員の皆様から頂いた委任やご意見を受け、小生以下の役員がリモート方式で実施した総会のみが実施出来ました。

会員の皆様と一同に会し、米空軍関係者の方達も含めて様々なお話や懇親の場を持てなかった事は残念ですが、今、日米を違わず国民一人一人が為すべき事は、新型コロナへの感染を防ぐ努力と自制の継続であり、この事が地域と国全体を早期に新型コロナ禍から脱するための最も簡単かつ重要な貢献でありましょう。

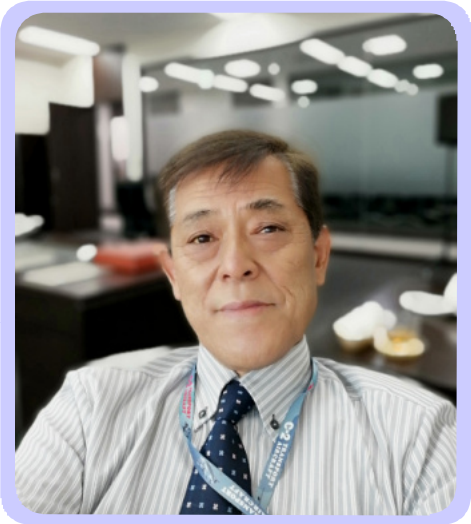
さて、我が国及び同盟国である米国がこのような新型コロナ禍からの脱却という問題に忙殺されている間にも、我が国周辺においては、北朝鮮によるミサイルの発射事案や、わが国固有の領土である尖閣諸島周辺における中国による執拗かつ悪質な不法な振る舞い等が相変わらず継続されています。

このような中、航空自衛隊及び米空軍の現役の皆さんは、従来までに経験していなかった困難な昨今の環境下にあっても、夫々が「知恵」と今まで蓄えてきた「技」を駆使して、日々の活躍を継続されています。

より一層の情報交換等によるミサイル行動関連での円滑な対処や、我が国周辺空域における米空軍爆撃機との共同訓練の実施等により、相互の協力・協業体制の強化に努め、日米同盟に基づき、不法な行動等に対して毅然とした姿を示す対応は見事であり、誠に頼もしいものです。

我々 JAAGA もこの日米空軍種間のより緊密な連携と発展、友人に対する温かな思いに基づく交流の促進を鋭意続けてまいります。何卒、会員各位のご協力をお願いいたします。

日米エアフォース友好協会会長　齊藤　治和



～【第 58 号】　目　次 ～

齊藤治和会長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
JAAGA総会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
コープ・ノース20参加部隊激励・・・・・・・・・・・・・・・3
日米相互特技訓練激励・支援・・・・・・・・・・・・・・・・8
日米優秀隊員表彰・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
空幕部長等講演会「防衛部長南雲空将補」・・・・・・・・・14
ブラウンPACAF司令官、次期米空軍参謀総長に指名される・17
米空軍将校航空自衛隊勤務だより・・・・・・・・・・・・・18
航空自衛隊コーナー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
米空軍コーナー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
正会員からの投稿～荒木淳一会員（その1）～・・・・・・・22
米空軍横田基地の行事参加・・・・・・・・・・・・・・・・・28
JAAGA理事の活動紹介～企画理事～・・・・・・・・・・・・29
令和2年度JAAGA事業計画・・・・・・・・・・・・・・・・・30
令和2年度役員・役員退任者・新入会員・・・・・・・・・・31
会員募集・編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

2020年度（令和2年度）JAAGA総会

“ Telework ” style JAAGA Annual Convention held on 7 May 2020

【総会開催日前後の動向について】

JAAGA において総会・講演会・懇親会（以下、「総会等」）の開催は、年度の一大事業であり、加えて今年度は東京オリンピック・パラリンピックの日程等にも配慮して、例年よりも早期に計画立案に着手し、準備を進めてきたところであった。

しかし、年初からの新型コロナウイルス感染拡大の影響が、3 月に入って以降一層顕著となり、11 日に WHO がパンデミックを表明し、国内でも選抜高校野球大会の中止が決定された。この時期あたりから、感染拡大に対する国内外の対応を踏まえつつ、総会等の延期又は中止をはじめとする代替策の検討を重ねることとなった。

その後、役員全員で「理事会の臨時会合」、「メールを主なコミュニケーション手段とする役員会等」、「総会にかかる議案説明資料等の事前郵送」等の検討・準備に取り組んだ。結果として、当時の情勢では講演会及び懇親会は中止せざるを得なかったが、総会については 5 月 7 日（木）、メール手段を用いて開催することができ、各議案は正会員の委任及び議決権行使をもってすべて承認された（議事進行等、総会の概要は下記のとおり）。

5 月 13 日（水）からは、新役員による JAAGA 組織の運営が開始された。新型コロナ禍の状況がいまだ不透明である中で、令和 2 年度事業計画を状況に応じて変更しながら、JAAGA の設立趣旨に基づき積極的に組織的活動を行っていくこととする。

（福江理事長記）

1　開会の辞

2　黙祷

正会員・故　長谷川孝一様（令和元年 9 月 13 日ご逝去）に対して、各役員が黙祷を行った。

3　総会成立に関する報告

JAAGA 会則第 9 条の 2 第 2 項において、『総会は、（委任状を含む）正会員の 3 分の 1 以上の出席により成立し、議決は出席者の過半数の同意による。』と定められている。5 月 7 日現在の正会員総数 259 名の内、議決権委任者 241 名、議決権行使者 18 名との集計結果となり、本総会の成立条件は満たされたと同時に、正会員全員の同意を得たことが報告された。

4　議案審議（議案説明資料は正会員に対し既郵送）

第 1 号議案（令和元年度事業報告（案））、第 2 号議案（令和元年度決算報告（案））、第 3 号議案（令和 2 年度事業計画 （案））、第 4 号議案（令和 2 年度予算（案））、第 5 号議案（会則の一部改正（案））、第 6 号議案（役員の選任（案））について審議し、すべて案の通り承認された。

5　質疑応答

議案とは別に、「会員数の伸び悩みに鑑み、会費の値下げを検討されたい」との要望があった。これを受け、「会費の見直しについては、引き続き会勢及び運営要領を見据えつつ、検討する」旨回答することとされた。

6　報告事項

理事の選任等（理事の選任、理事長等の委嘱及び所掌分担、退任者、顧問委嘱）については、既郵送資料の記載内容に加え、沖縄支部事務局長の交代が報告された。

7　会長挨拶（抜粋）

役員の皆さん、本日は、従来とは異なる形態での総会に参加して頂き、誠にありがとう。令和 2 年度の JAAGA 総会は、事前に正会員全員に郵送で開催の形態や委任等に関して説明した上で、小生以下の役員により、メールや電話を使用するリモートでの総会とし、JAAGA としての決議（意思決定）を得ることが出来た。

本日の総会開催のためには、特にその準備において従来に比し格段の業務量の増加となった。役員の方々には改めて心からお礼を申し上げる。

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、本年の 3 月以降は、JAAGA が計画あるいは参加を予定していたほぼ全ての業務や行事がキャンセルとなり、今後の先行きも未だ見通せない状況にある。特に、各種制限が存在する現環境下において JAAGA の活動を考える際には、航空自衛隊や日本国内での各種事情のみならず、在日米軍や米国内での各種事情にも十分に配意する必要がある。このため、役員の皆さんにはこれらの情報や動きに関しては、よくアンテナを伸ばし、役員間で情報等を正しく共有しつつ、タイミングを失せず、効率的・効果的な活動を行うことが重要だと考えるので、何卒、この点につき、宜しくご協力をお願いする。

今回、会則の一部改正につき了承された。名誉会員としての要件が見直され、日米空軍種間での真の友人としての幅と深みの充実が期待できるものと確信している。かねてより毎年企画し、実行してきた「JAAGA 米国訪問」については、現状においては、その具体的な案は確定し得ない状況にあるが、訪米が叶った際には、必ずや今回の改正の趣旨が活きてくるものと期待している。

また、今回の総会において、役員の交替が了承された。これまでのご活躍に感謝すると共に引き続き、会の運営が活き活きとしたものになるよう、ご尽力、ご協力をお願いする。

なお、本総会では、新体制が報告された。各位におかれては、従来までの枠に捉われることなく、日米空軍種間のより強固な紐帯に繋がるものならば、積極的に進めるという気概を持ち、その職でのご活躍を期待している。

最後に、日本国内における新型コロナウイルス感染の状況は、徐々にではあるが終息に向かうベクトルが見え始めた頃かと考えられる。しかしながら、今の努力を引き続き保持する事が確実かつ早期の終息に直結することは言を待たない。皆様がご家族共々、健康で過ごされるよう、祈念する。

8　閉会の辞

コープ・ノース20における日米豪共同訓練等参加部隊を激励

JAAGA cheers Koku-Jieitai participants to Cope North 20

令和２年１月 14 日（火）、清藤理事長（小野企画理事、木村広報理事随行）が、13 時 30 分から横田基地に航空総隊司令官井筒俊司空将（副司令官上ノ谷寛空将、幕僚長柿原国治空将補同席）を、15 時 25 分から府中基地に航空支援集団司令官金古真一空将（副司令官今城弘治空将補同席）を訪ね、「コープ・ノース 20」（Cope North 20：CN20）における「日米豪共同訓練」及び「日米豪人道支援・災害救援共同訓練」に参加する航空総隊及び航空支援集団の部隊に対する JAAGA からの激励品を手交し、訓練の成功を祈念した。

今回で CN は 20 回目となり、C-2 が初めて参加する他、「日米豪共同訓練」には海上自衛隊の US-2×１機及び人員約 30 名も参加する。

総隊においては、米軍との良好かつ緊密な関係、各種装備品の動向、軍種による運用要領の違い等、CN20 に関連する様々な話題について意見交換がなされ、最後に司令官から、「しっかりと、積み上げてきたものを維持しながら、一つでも更に積み上げられるように頑張りたい」との決意が示されるとともに、横田基地研修や表彰式などを含め JAAGA の活動に対する謝辞を頂戴した。

JAAGA Chairman Kiyofuji, Director Ono and Kimura call on Lt Gen Izutsu, Commander of Air Defense Command, Lt Gen Kaminotani, Vice Commander & Maj Gen Kakihara, Chief of Staff, in Yokota AB on 14 Jan 2020

JAAGA Chairman and Directors call on Lt Gen Kaneko, Commander of Air Support Command & Maj Gen Imaki, Vice Commander, in Fuchu AB on 14 Jan 2020

支援集団においては、JAAGA の支援に対する謝意が示され、引き続き、C-2 活躍の現状と期待、人道支援・災害救援（HA/DR：Humanitarian Assistance/Disaster Relief）訓練に力を入れていること、C-2 は初参加であるが要員はこれまでの訓練にも組み入れており心配はしていないこと、等の話題が提供され、言葉の端々に、海外任務・訓練はもはや特別なことでは無く当たり前になっていることがにじみ出ていた。そして司令官から、「若い隊員や様々な特技の隊員にも海外訓練等に参加する機会が当たり前のようにあり、経験してきた隊員達を育てていく。意識が変われば、何かが生まれてくる。総隊、支集団の垣根なくやっていきたい」との力強い言葉が発せられた。

（木村理事記）

Grand Photo
Airmen from the U.S. Air Force, Royal Australian Air Force, and Koku-Jieitai stand in formation together to start Trilateral Exercise Cope North 20, 12 Feb. 2020, Andersen Air Force Base, Guam

（訓練概要：航空自衛隊 HP から）

【日米豪共同訓練】　「実戦的訓練環境の下、日米共同対処能力及び部隊の戦術技量の向上を図る」ことを目的として、展開・撤収を含み 1 月 31 日（金）～3 月 8 日（日）の期間、米国グアム島アンダーセン空軍基地、北マリアナ諸島テニアン島、及びファラロン・デ・メディニラ空対地射場並びに同周辺空域において実施され、航空総隊から第 8 航空団（築城）、第 9 航空団（那覇）、航空救難団（入間）及び警戒航空隊（三沢）の人員約 350 名、F-15J/DJ×8 機、F-2A/B ×6 機、U-125A×2 機、E-2C×2 機が参加、航空支援集団から第 1 輸送航空隊（小牧）、第 3 輸送航空隊（美保）の人員約 100 名、C-2×1 機、KC-767×1 機が参加し、防空戦闘、戦術攻撃、対戦闘機戦闘、空対地射爆撃、電子戦、空中給油、戦術空輸、航空輸送、物料投下及び捜索救難の訓練が行われた。

【日米豪人道支援・災害救援共同訓練】　「米豪空軍との相互運用性の向上を図る」ことを目的として、2 月 12 日（水）～26 日（水）の期間、米国グアム島アンダーセン空軍基地、北マリアナ諸島サイパン島、テニアン島及びロタ島並びに同周辺空域において実施され、航空総隊から航空救難団（入間）、戦術教導団（横田）等の人員約 20 名、U-125A ×2 機が参加、航空支援集団から第 3 輸送航空隊（美保）、航空機動衛生隊（小牧）等の人員約 50 名、C-2×1 機が参加し、航空輸送、物料投下、捜索、航空患者搬送及び飛行場応急復旧の訓練が行われた。

Media Day Photo Ex

USAF helicopter and Koku-Jieitai search and rescue aircraft U-125A

訓練参加者の所感

第９航空団第 204 飛行隊　２等空尉　近藤　伸行

今回はじめて海外訓練に参加し、他国との相互理解と友好親善を深めることができた。展開の際、現地での生活や訓練に慣れるまでは、想像できないことも多くあり、多少の不安があったが、展開後は、慣れない環境の中でいかに自分のパフォーマンスを発揮させるかを考え、万全な準備で臨み、自分の技量の向上に努めた。また、他国の生活文化や日本では経験できない航空機の規模や広大な空域での充実した訓練により、改めて戦闘機操縦者としての使命感と責任感を感じることができた。なかなか飛ぶことができないグアムの空で訓練できたことは、日本の操縦者の一員として大変光栄なことであった。

本訓練は、米軍及び豪軍との相互理解を深める大変良い機会であった。特に強調されていたのは日米豪の Trilateral の協力関係であった。我が国の安全保障環境を考えるうえで米豪軍との相互理解は非常に重要であると認識していたが、それを肌で、かつ若いうちに感じられたことは非常に有意義であった。加えて、日本で感じることのできなかった日米豪の各国が抱える安全保障体制や各国が直面している課題について認識することができた。我が国を取り巻く安全保障環境が大きく変化していく中、より重要になるのが同盟国との相互理解とそれに基づく関係強化である。今回、訓練中及び訓練外の様々な場面で米豪軍のパイロットと交流できたことは、今後、共同任務等を行っていく上で非常に良い経験となった。

航空自衛隊の更なる精強化のため、本訓練で得た絆を今後更に強固なものにしていくとともに、この経験を糧に任務や訓練に邁進していく所存である。

最後に、訓練参加にあたりご支援をいただいた多くの方にこの場をお借りして感謝申し上げたい。

Media Day Photo Ex

DACT (Dissimilar Air Combat Training) with USAF F-16

Koku-Jieitai F-15 taxies for takeoff

第８航空団第６飛行隊　２等空尉　市原　智志

２月から３月にかけ、グアム・アンダーセン空軍基地におけるコープ・ノース 20 に参加した。海外訓練は、私にとって初めての経験であり、戦闘機パイロットとして多くのことを学ぶことができた。日本ではできない大規模な訓練ができる飛行場、空域及び環境があり、米空軍や豪空軍とよい関係、よい教訓、そしてよい仲間を得ることができた。多くのチームが参加する大規模な作戦においては、戦闘機、爆撃機、早期警戒管制機、輸送機等の機種に関係なく戦技に関する統一した認識を共有しており、統一感を持って訓練に臨んでいることに感銘を受けた。

今回の訓練で得た教訓を糧に、より強固な協力関係を築き、日本及び世界の平和に貢献できるよう、日々の訓練に邁進していきたい。

最後に、この訓練に関し調整等をしてくださった方々に感謝を申し上げたい。

警戒航空団第１整備群装備隊　２等空曹　柴田　幸夫

コープ・ノース 20 に合同 MOC（Maintenance Operation Center）要員として参加した。恒常的に実施した事項として、１つ目は、毎飛行後の自衛隊航空機への燃料補給に関して米軍と調整した。自衛隊のやり方と少し違いはあったが、円滑に実施できた。２つ目は、毎日２回実施される米軍第 36 整備群のミーティング資料を作成し発表した。全自衛隊航空機の飛行計画、継続中の整備作業を掌握し、ミーティングで発表した。その際、米軍からの質問があれば自衛隊側へ問い合わせ回答した。その他、都度実施した事項として、各訓練隊から器材借用の要請があれば米軍に借用の可否を問い合わせ、必要であれば借用する現場へ赴き調整を行ったほか、航空機に何らかの支障が発生した場合は米軍からその情報を収集し、各訓練隊へその内容を伝達し危害予防に努めた。

本訓練期間中に学んだ事項として、１つ目は、航空機の状態を表す用語の違いである。当初戸惑ったが米軍の略語を学ぶことができた。２つ目は、米軍の外来機やその整備員に対する受け入れ態勢である。借用器材専門の部隊が存在し、車両と器材で調整部隊が異なる。調整先を理解することにより、円滑に調整できるようになった。本訓練で学んだことを原隊に戻り普及するとともに、今後、合同 MOC で勤務する機会に備えて、更により良い業務が実施できるよう日々精進していきたい。

Meeting of trilateral HA/DR traning among Koku-Jieitai, U.S. Air Force and Royal Australian Air Force

Meeting at the trilateral command post

Scenery of the command post of Trilateral Task Force

航空救難団整備群修理隊　２等空尉　吉村　彩子

救難機訓練隊の整備幹部として本訓練に参加した。米軍と関わる中で、自衛隊との様々な違いを知ることができた。また、初の海外訓練ということもあり、自らの調整力や英語力が試される場面を想像して不安を感じていたが、米軍は非常に友好的であり、円滑に調整等を進められ、任務を完遂することができた。今回の訓練の中で、特に印象深かったことを以下に述べたい。

１　米軍の職場環境

階級、立場、役割等による区別は明確であるものの、それに強く縛られることなく、非常に気さくに意見交換ができる雰囲気があり、風通しの良い職場であると感じた。米軍に限らず、アメリカ人は何事にもはっきりしていることが多く、ある種冷たい印象すらあるのではないかと考えていたが、そういうことはなく要望や意見をはっきり伝えることができる雰囲気に好感を抱いた。

２　英語力の必要性

整備幹部として、米軍と調整しなければならない場面が何度かあった。具体的には、管制タワーとのコンタクトや部隊見学や器材借用のための電話調整等である。いずれも、表情が伝わらないことに加え、ボディー・ランゲージも使えないため、自らの拙い英語力だけが頼りだった。事細かに、かつ確実な調整をするためには、やはり英語力が欠かせないということを身に染みて感じた。訓練中、自衛隊の航空機現況を、米軍の整備幹部に対して英語でブリーフィングする機会があり、報告要領等を習得できたことは、今後の役に立つ貴重な体験であった。

３　米軍の自衛隊に対する印象

訓練全体を通して感じたのは、米軍が自衛隊に対して友好的に接してくれているということである。我々の航空機を見に来てくれたり、ワッペンやメダルに興味をもって話しかけてきてくれたり、現場における友好的な雰囲気を感じた。今後、海外訓練等、米軍との交流の機会があれば、引き続き自衛隊の顔として真摯に米軍と関わり、日米間の関係を更に強固なものにするため貢献していきたい。

During JDAM drop training

A scene of trilateral HA/DR traning

Scenery of adjustment between Koku-Jieitai staff and Royal Australian Air Force staff

Koku-Jieitai C-2 in flight

第８航空団第８飛行隊　３等空曹　植松　祐介

救命装備品整備員として、初めてコープ・ノース 20 に参加し、充実した日々を過ごすことができた。救命装備品整備員の待機場所は、他の SHOP と違い、日米豪共同施設であったため、各軍の装備品の違いや運用方法、管理の仕方など様々なことを学ぶことができた。出発前まで英語を勉強していたものの、ネイティブの会話が教材よりも速かったことや、オーストラリア独特の発音等、最初は戸惑ったこともあった。しかし、携帯電話の翻訳機能は極力使わず、身振り手振りを交えてなんとかコミュニケーションを取るように努めた。積極的なコミュニケーションの甲斐もあり、私のことを「MATSU」、「YOU」と呼んでくれる新しい友人もできた。上手く英会話ができなくても、気持ちを込めて接すれば皆それに応えてくれるため、英語を勉強する意欲が高まった。

私に貴重な経験を与えてくれた全ての方に感謝申し上げたい。

Checking the maintenance work together

第３輸送航空隊第 403 飛行隊　２等空尉　古賀　太郎

～　コープ・ノース 20 に C-2 が初参加　～

１月 31 日～３月８日の間実施されたコープ・ノース 20 における日米豪共同訓練及び日米豪人道支援・災害救援共同訓練に、C-2 の飛行要員として参加した。この訓練は日米豪を中心とし、人員約 1,900 名、参加航空機約 100 機以上が参加する大規模な訓練であった。私は、このような大規模な訓練に参加するのは初めてであり、C-2 も同様に、国外における共同訓練に使用されることは初めてであったため、この機会を与えられたことを光栄に思うとともに、C-2 の能力を最大限に発揮できるように尽力した。

全般を通じ、関連部署の担当が想定及び状況付与に対し適確に対応するために、３カ国共同の事前調整及び作戦計画の立案を行い、実施段階においても飛行要員との調整を密にすることで柔軟に計画を実行し、共同対処能力及び戦術技量の向上を図ることができた。ただし、豪空軍は自国の森林火災への対処のため、輸送機及び一部人員が不参加となり、豪空軍輸送機を除いた日米での訓練を実施した。

日米豪人道支援・災害救援共同訓練時の C-2 の輸送能力は高く評価されており、C-130 等と比べてより多くの人員及び貨物を搭載可能なことから、重宝されていた。日米豪共同訓練時は、米空軍 F-16 との異機種間空戦訓練を実施した。事前に、C-2 にとって有効と思われる空対空脅威回避機動について、綿密にブリーフィングを行い、飛行に臨むことができたため、飛行後に経験豊富な米軍戦闘機操縦者から有効なアドバイスを得ることができた。今後においても、同様の訓練を通じて、３カ国間のシームレスな防衛態勢の構築が必須であるとともに、マルチラテラルな訓練を継続することの必要性を強く感じた。

日米相互特技訓練を激励・支援
JAAGA cheers and supports Japan-U.S. Bilateral NCO Exchange Program

令和元年度日米相互特技訓練は、下表「令和元年度日米相互特技訓練の実績」に記載のとおり、空自の受入れ４基地等（三沢、大湊、防府南、築城）及び米空軍の受入れ３基地（三沢、横田、嘉手納）において実施された。日米相互特技訓練には毎年、JAAGA として微力ながら激励・支援を行っている。

令和元年度　日米相互特技訓練の実績

空自受入基地 (training base)	期間 (period)	参加人員 (participants)	米空軍受入基地 (training base)	期間 (period)	参加人員 (participants)
三沢基地 (Misawa AB)	2019 Aug. 19～30	10	三沢基地 (Misawa AB)	2019 Sep. 13～.25	15
大湊分屯基地 (Ominato Sub Base)	2020 Jan. 20～27	6	横田基地 (Yokota AB)	2019 Oct. 17～25	15
防府南基地 (Hofu-Minami AB)	2020 Jan. 20～28	6	嘉手納基地 (Kadena AB)	2019 Nov. 14～22	15
築城基地 (Tsuiki AB)	2020 Mar. 9～17	9	（空幕教育課提供）		

本訓練は、年々充実してきており、日米双方の参加希望者や訓練受入れを希望する部隊も増えて、空自准曹士隊員と米空軍下士官の相互理解及び友好の深化に寄与している。空自が F-35 の部隊建設を進めていく中で必須である英語能力向上の動機づけとしても、本訓練の意義は大きいとのことである。

今回、築城基地において日米相互特技訓練に参加した８空団８飛行隊川谷亮太３等空曹と防府南基地において米空軍下士官に対する研修支援を担当した空教隊福元理矢子３等空曹から、それぞれ所感文を寄稿していただいた。現場で頑張る隊員・部隊の状況がよくわかるので是非御一読ください。

（福永理事記）

訓練所感　Training Impressions

第８航空団飛行群第８飛行隊
３等空曹　川谷　亮太（航空機整備）

３月９日（月）～17 日（火）の日程で築城基地において、在日米空軍第 374 空輸航空団（横田）から９名の下士官が参加し、日米相互特技訓練が行われた。今回の訓練では、新型コロナウイルスの影響でアイスブレイク及びフェアウェルパーティーが中止になるなど、計画通りではなかったものの、今回参加した自衛隊員が全員で協力するとともに各所在部隊の協力のもと、訓練内容を実施することができた。特に、２日目以降は部隊研修が中心の訓練だったが、英語での説明や、英語を用いた資料を作成するなど、米空軍側を考慮しており、計画的な訓練を実施することができた。

私が所属する第８飛行隊での研修では、F-2 戦闘機の概要説明や外装タンクの脱着、タイヤ交換など普段の整備作業の様子を説明した。参加した米空軍下士官は、初めて知ることが多く、貴重な体験ができた様子であった。また、第８飛行隊員との交流も楽しんだ。

史跡研修では、羅漢寺、青の洞門、宇佐神宮を巡り、日本の歴史や文化を伝えた。英語で説明するのはとても苦労したが、旅行をしている気分で楽しい時間を過ごすことができた。

休日には、温泉巡りとバーベキューを実施した。一緒に湯船に入る日本ならではの交流で、さらに絆を深めることができた。バーベキューでは、日米双方とも多くの参加者が参加し、お酒を交わしながらとても楽しい時間を過ごすことができた。また、それまでにあまり話せなかった米空軍下士官とも、積極的に話すことができた。

体育訓練等では、太鼓演奏、銃剣道、弓道の見学及び体験を実施した。どの訓練も積極的に取り組んでいた。特に、バスケットの試合では、米空軍対自衛隊や日米混合チームで対戦するなど、スポーツを通して交流することができた。

Commemorative photo of “Zenkai Osho” pose at “Ao-no-Domon”

Reluctant farewell between SSgt Kawatani and TSgt Herring

意見交換会では、日米双方とも今回の訓練に対する所感、改善点など真剣に話し合い、貴重な意見等も多くあり、参考になった。また、意見を発言する際には、英語で挑戦する隊員が多く、英語能力が向上していると実感することができた。

最後の見送りでは、参加した米空軍下士官から「とても楽しかった」「また会おう」など感謝の言葉を多く頂き、今回の訓練に参加して本当によかったと感じた。

私は、英語には自信がなく、今回の訓練への参加はとても不安であったが、貴重な経験ができた。もっと英語を話すことができたなら、さらに絆を深めることができたと感じた。今後は継続して英語を学習して英語能力を向上させ、今回のような訓練等に生かしていきたいと思う。

最後に、本訓練を支援していただいた皆様に感謝するとともに、今後も日米の交流を継続していただくようお願いします。

【防府南基地】

航空教育隊（以下「空教隊」という。）は、1 月 20 日（月）～28 日（火）の間、日米相互特技訓練における在日米空軍下士官に対する研修支援を実施した。空教隊における受入れは初めてであり、4 月に受入れ希望をしたものの、10 月に実施された航空教育集団武道大会の運営等に追われてしまい、日米相互特技訓練準備の着手が後手となった。11 月に構想を作成し準備組織を発足させたのが 12 月、残り 1 か月（年末年始休暇含む）という背水の陣で臨んだが、隊准曹士先任を準備委員長とし、訓練係、対番係及び管理係という 3 つの機能で準備を進捗させ、米空軍を迎える準備をすることができた。各係長の隊員の指揮及び調整力は現場力の高さを物語っており、正に特技職のプロであるとともに、部隊団結の核心たる姿を感じとれた。米空軍を受け入れる前であったが准曹士で 1 つの任務を成し遂げ、一体感が生まれた瞬間であった。

空教隊は、少子高齢化及び男女共同参画における取組みにより、女性入隊者数が増加していることから、女性教官の養成に注力している。特技訓練による特技能力の向上を行うほか、出産、育児休暇及び職場復帰等のケアやワークライフバランス（以下「WLB」という。）の推進を行っている。職務復帰後の配置をローテーションするなど工夫を施している。

今回の対番要員の一人は育休を 2 回取得しており、業務と育児を並行しながらの日米相互特技訓練対番要員へのチャレンジは大きな意味があったと思う。以下は対番要員の所感である。

訓練所感　Training Impressions

航空教育隊第 1 教育群第 2 教育大隊
3 等空曹　福元　理矢子

日米相互特技訓練を通じ、「航空自衛隊」という枠を越えて米空軍と関わることができ、自らの固定観念や習慣となっていた業務に新たな風を吹きこませることができた。

本訓練で行われた特技訓練では、米空軍下士官の訓練環境及び業務内容等を踏まえて彼らが参考になるような訓練を計画することはもちろん、空教隊の歴史、任務及び規則類を改めて確認しておく必要性を感じた。

私は第 1 教育群第 2 教育大隊（空教隊の編制単位部隊）において、練成訓練及び課程教育に係る業務を担当しているが、教育班長としての経験が浅く、当初、準備を進めることにとても苦戦した。準備に際して、米空軍下士官の対番要員として隊舎内の表示を英語に変え、階級の英語表記を掲示し、課程教育の現状掌握等をほとんど 1 人で実施していた。しかし、本訓練が近づくにつれ、部隊の皆が興味を持ち始め、準備のみならず特技訓練にも積極的に関わってくれた。特技訓練では、米空軍下士官と交流を重ねることにより、私自身、個人訓練や学生教育に活用できる知識を得ることができた。私は、当初、簡単な英会話ジェスチャーで何とか意思疎通をしていたが、最終日には、人と人とが関わる上で心を通じさせるコミュニケーション能力が格段に向上したと感じる。

日米相互特技訓練は終了したが、英語能力向上には引き続き力を入れていきたい。また、個人的にも英語を勉強し、次の英語を使用する訓練では、訓練参加者の手助けとなりたい。一方、語学のみならず、本訓練を通じて向上したコミュニケーション能力をグループ・メンタリング及び WLB に関する相談等において活用し、人と人との心の関係を深め、温かみのある業務調整や後輩指導に生かしていきたい。

Explaining each person's work

Friendly lunch time

Ice breaking time begins

令和 2 年度の日米相互特技訓練の計画の調整は、次に記載のように担当者間で共有されている。例年 6 月頃に大まかな計画が決定されているが、今年は新型コロナウィルスの影響により遅れが見込まれるとのことである。

（空幕教育課からの聞き取りにより、福永理事記）

1　日米相互特技訓練（差し出し）
（1）時期：第 2 四半期～第 4 四半期
（2）期間：10 日程度
（3）場所：米空軍基地（三沢、横田、嘉手納）
（4）参加：40 名程度
2　日米相互特技訓練（受入れ）
（1）時期：第 2 四半期～第 4 四半期
（2）期間：1 週間程度
（3）場所：航空自衛隊の基地等
（4）参加：各米空軍基地（三沢、横田、嘉手納）から参加

令和元年度 日米優秀隊員表彰
JAAGA AWARD for Koku-Jieitai & USAF Brilliant Soldier in FY 2019

令和元年度JAAGA日米優秀隊員表彰式が、1月末～2月中旬にかけて横田、那覇及び三沢の各基地において行われた。本表彰行事は平成10年度から開始されて以来今回が22回目となり、被表彰者数は総計157名（空自91名、米空軍66名）を数えた。（深瀬理事記）

～日米優秀隊員の一覧表をP13に掲載～

― 沖縄地区表彰式 ―
Okinawa area (Naha AB)

２月６日（木）、令和元年度沖縄地区 JAAGA 表彰行事が航空自衛隊那覇基地で実施された。

表彰式は基地講堂、祝賀会食は基地幹部食堂において実施された。航空自衛隊からは南西航空方面隊司令官鈴木康彦空将及び第９航空団司令稲月秀正空将補以下 122 名、米空軍からは第 18 航空団第 18 任務支援群司令官サング・ドーン（Thang Doan）大佐以下 20 名、そして齊藤会長及び丸野沖縄支部長以下９名の JAAGA 正会員及び賛助会員を含めた総勢 151 名の参加者を得て開催された。

今年度の航空自衛隊側被表彰者は、那覇救難隊松山寿空曹長で、日米共同訓練に際し日米相互運用性に大きく貢献するとともに「日米女子会」を企画開催するなど、日米の友好親善および相互理解の増進に寄与した功績が認められての表彰であった。

また米空軍側被表彰者は第 18 航空団のデリク・スタイナー空軍中尉（1st Lt Derryk k. Stiner, 18th AW, Kadena AB）で、卓越した英語、日本語能力をもって、日米間の各種会議での相互交流、日米相互幹部グループの発展強化への貢献、航空自衛隊英語競技会の審査、指導などの功績が認められての表彰であった。

表彰式は、南西航空音楽隊による日米国歌の演奏から始まり、続く齊藤会長の挨拶では、平素の我が国の安全保障への貢献に対する日米両部隊への感謝、本表彰事業の意義、被表彰者への祝意と感謝、そして本表彰行事に係る多くの関係者、特に那覇基地の積極的なご協力、ご支援に対するお礼が述べられた。挨拶に続き、齊藤会長から日米の被表彰者に表彰状と記念楯が授与されるとともに、被表彰者の功績が讃えられた。

その後、航空自衛隊代表の稲月基地司令と米空軍代表のドーン大佐からご祝辞があり、日米両国の協調がこの地域の安定と繁栄に寄与していること、そして航空自衛隊と米空軍との間の絆強化の重要性、被表彰者の活動が仲間意識と団結を強化していることなど、被表彰者へのお祝いと敬意の言葉を述べられた。

祝賀会食は、丸野支部長の挨拶、鈴木司令官の乾杯から始まり、日米出席者が終始和気藹々と受賞者を称える温かな雰囲気の祝賀会食となった。最後に、那覇救難隊長徳田武嗣２等空佐の納杯で締め括られた。

本行事にあたり、ご尽力いただいた那覇基地、嘉手納基地のスタッフの皆様に心から感謝申し上げます。

（渡邊理事記）

At JAAGA Award Ceremony in Naha AB on 6 Feb. 2020, 22 people, including President Saitoh, Lt Gen Suzuki, Maj Gen Kageura, Maj Gen Inatsuki, Col Doan and Mr. Maruno are in line.
CMSgt Matsuyama, Koku-Jieitai and 1st Lt Stiner, U.S. Air Force are commended

Award from President to CMSgt Matsuyama

Award from President to 1st Lt Stiner

Mr. Maruno, Head, Okinawa branch at luncheon

Commemorative photo with Naha AB commander

― 関東地区表彰式 ―
Kanto area (Yokota AB)

1 月 31 日（金）、令和元年度関東地区 JAAGA 表彰行事が航空自衛隊横田基地において実施された。

表彰式は基地講堂、記念植樹は関東ロッジ周辺、祝賀会食は将官宿舎レセプションルームにおいて開催され、航空自衛隊からは、作戦システム運用隊司令兼横田基地司令荒木俊一 1 等空佐以下 60 名、米空軍からは、第 374 空輸航空団司令官ジョーンズ空軍大佐以下 20 名、そして横田基地周辺協力者として横田基地協力会会長山下様及び横田基地 OB 会会長日吉様他のご来臨を頂き、齊藤会長以下 3 名の JAAGA メンバーを含め、総勢 85 名の参加者を得た。

今年度の航空自衛隊側被表彰者は、作戦システム運用隊（横田基地）石塚哲也 1 等空曹、航空気象群（府中基地）古賀敦准空尉、及び第 2 輸送航空隊（入間基地）森本賢 2 等空曹の 3 名であった。石塚 1 曹は、航空自衛隊横田基地の発足以来、米空軍施設部隊と緊密に連携しつつ、各種日米共同訓練の積極的な支援活動を通じて貢献したことが、古賀准尉は、平成 29 年度以降、各種日米交流行事において、米空軍最先任上級曹長と密接に連携して円滑な運営を支援したほか、横田フロストバイトロードレース、スペシャルオリンピックスなどのボランティア活動により貢献したことが、また森本 2 曹は、空中輸送員として各種の日米間の共同訓練に参加する中で、日米両空軍種間の交流事業に貢献したほか、横田及び入間基地で開催される各種大会、行事において卓越した語学能力をもって円滑な支援活動により貢献したことなどが受賞の理由であり、それぞれ日米各種交流行事での積極的な貢献や日米関連事業での活躍が認められたものである。

一方、米空軍側被表彰者は、第 374 空輸航空団（米軍横田基地）ティモシー J.ジョンソン空軍曹長であった。ジョンソン曹長は、空中輸送員として、日米の各種訓練演習及び交流事業において遺憾なくその能力を発揮するとともに、空自英語競技会での語学支援、各種の文化交流事業を促進し相互理解を深めるなどの貢献が認められた。

表彰式では、齊藤会長から、航空自衛隊及び米空軍の活動に対する謝意と平素の JAAGA の活動へのご支援に対する感謝、そして本表彰行事に係る関係者、特に横田基地による積極的なご協力、ご支援に対する謝辞が述べられた。挨拶に続き、齊藤会長から日米 4 人の被表彰者にそれぞれ表彰状と記念楯が授与されるとともに、その功績が讃えられた。続いて、荒木基地司令及びジョーンズ司令官から、被表彰者を称える旨のご祝辞を頂いた。

その後、関東ロッジ周辺にて、来賓及び受賞者の皆様、齊藤会長などで記念植樹が行われた。

祝賀会食においては、まず山下協力会会長からご祝辞を頂くとともに乾杯のご発声を頂き、歓談の後、4 人の被表彰者から受賞の言葉が述べられ、それぞれ今回の受賞を光栄に思うこと、支えてくれた上司、同僚、家族への謝意、そして今後も一層日米関係強化のため尽力するとの決意が表明された。会食の最後には JAAGA 福江理事からの挨拶があり、令和元年度関東地区 JAAGA 表彰行事は有意義かつ楽しい雰囲気の中で幕が閉じられた。

横田基地のスタッフの皆様、大勢の基地隊員の皆様、ご支援をいただき、本当に有難うございました。

（新谷理事記）

Award from President to MSgt Ishizuka, W.O. Koga, TSgt Morimoto and MSgt Johnson

At JAAGA Award Ceremony in Yokota AB on 31 Jan. 2020, 25 people, including President Saitoh, Col Araki, Col Jones, Mr. Yamashita and Mr. Hiyoshi are in line.
MSgt Ishizuka, W.O. Koga, TSgt Morimoto, Koku-Jieitai and MSgt Johnson, U.S. Air Force are commended

Congratulations from Col Araki, Col Jones, President Saitoh at the Ceremony and Director Fukue at the Celebration lunch

― 三沢地区表彰式 ―
Misawa area (Misawa AB)

2 月 14 日（金）、令和元年度三沢地区 JAAGA 表彰行事が三沢基地米空軍将校クラブにおいて実施された。

本表彰行事には、航空自衛隊から北部航空方面隊副司令官熊谷三郎空将補、第 3 航空団司令兼三沢基地司令久保田隆裕空将補をはじめ約 60 名が、米空軍から第 35 戦闘航空団副司令官クリストファー・ハモンド大佐をはじめ約 40 名が出席された。また、三沢市防衛協会会長野坂篤司氏はじめ三沢基地周辺協力団体の皆様のご臨席を賜り、齊藤会長、丸山三沢支部長、山本三沢支部事務局長はじめ JAAGA メンバー 5 名を含む、総勢約 110 名が参加する盛大な式典となった。

今年度の航空自衛隊側被表彰者である北部航空警戒管制団警戒通信隊井口健二空曹長は、三沢基地准曹会会長として、「北空司令官杯綱引き大会」や「日米下士官交流・日米基地合同マラソン」における支援・統制等、日米交流の企画調整及び運営を積極的に行い、空自と米空軍の友好親善と相互理解に貢献した功績が認められた。

また米空軍側被表彰者である、第 35 戦闘航空団第 35 施設隊隊長のデビッド・ダンマイヤー中佐（Lt Col David C. Dammeier, 35th FW, Misawa AB）は、空自施設部隊との連携を保ち、日米の施設関連プロジェクトの推進や緊急対応処理の施設関連訓練の改善及び航空自衛隊 EOD 訓練者の知識技術向上に努めるほか、空自隊員と地域住民のパーティーを計画するなど、空自と米空軍の友好親善と相互理解に献身的に貢献した功績が認められたものである。

表彰式は、北部航空音楽隊による日米両国歌の演奏から始まり、冒頭の齊藤会長の挨拶では、厳しい国際環境において黙々と任務を果たしている日米両部隊への敬意と感謝、本表彰事業の意義と協力に対する謝意、被表彰者への祝意と感謝、そして、遠く故郷を離れた地において任務を遂行されている米空軍軍人に対する敬意と感謝の言葉が述べられた。挨拶に続き、齊藤会長から日米の被表彰者それぞれに表彰状と記念楯が授与され、固い握手とともにその功績が称えられた。

来賓祝辞においては、久保田基地司令から、被表彰者に対するお祝いと感謝の言葉とともに、「三沢基地は日米運用部隊が同じ地に所在するという得難い環境にある。今回表彰されたお二人を模範とし、今後もより一層強固な友情を築いてまいりたい」旨の祝辞と決意が述べられた。また、ハモンド副司令官からは、二人の被表彰者の功績に対する賞賛と受賞に対する祝意、そして、本表彰式を主催した JAAGA 関係者と、平素から友情を育んでいる空自三沢基地隊員に対する謝辞が述べられた。

表彰式後の祝賀会食においては、三沢つばさ会会長倉持晶郎氏による、「日米安全保障条約調印 60 周年を機に更なる友好親善の深化を祈念する」旨の乾杯のご発声で和やかな食事会が始まり、三沢基地における活発な日米交流行事の話題などで会話が盛り上がった。会食の終盤には日米の被表彰者から挨拶があり、井口曹長からは、自衛隊と米軍の橋渡し役として相互理解とパートナーシップの強化のために実施している様々な活動が、ダンマイヤー中佐からは、日米施設部隊共同での様々な訓練等がそれぞれ紹介された。そして、両者から、今回の受賞を光栄に思うこと、支えてくれた上司、同僚、家族への謝意、そして今後も日米の友好関係強化につながる活動を続けていきたいとの意志が伝えられた。

会食の最後は、丸山泰 JAAGA 三沢支部長による納杯の発声で締めくくられ、すべての行事が盛会のうちに終了した。

本行事の開催にあたって多大なるご尽力をいただいた日米三沢基地の関係各位に対して心から感謝申し上げます。（深瀬理事記）

At JAAGA Award Ceremony in Misawa AB on 14 Feb. 2020, 30 people, including President Saitoh, Maj Gen Kumagai, Maj Gen Kubota, Col Hammond, Mr. Kuramochi and Mr. Maruyama are in line.
CMSgt Iguchi, Koku-Jieitai and Lt Col Dammeier, U.S. Air Force are commended

Award from President to CMSgt Iguchi and Lt Col Dammeier

Congratulations from Maj Gen Kubota, Col Hammond, Mr. Kuramochi and Mr. Maruyama

― 受賞者及び功績の概要 ―
JAAGA AWARD 2019 Recipients and their Achievements

	部 隊	受 賞 者	功 績 の 概 要
空自 JASDF	北部航空警戒管制団（三沢）Misawa	 空曹長　井口　健二 CMSgt Kenji Iguchi	三沢基地准曹会会長として、日米交流の企画、調整及び運営等に積極的に携わり、「北部航空方面隊司令官杯綱引き大会」や「日米下士官交流・日米基地合同マラソン」において支援・統制を行う等、三沢基地における航空自衛隊と米空軍との友好親善および相互理解の増進に貢献。 As the president of Misawa AB Junsou-kai, he has shown his outstanding ability to make plans, manage and coordinate Japan-U.S. interchange activities. He has particularly contributed to the success of the Northern Air Defense Force Cup " Tug of War Competition" and Japan-U.S. NCO interchange joint marathon in Misawa AB in order to promote the mutual understanding between Koku-Jieitai and USAF.
	第2輸送航空隊（入間）Iruma	 2等空曹　森本　賢 TSgt Satoshi Morimoto	空中輸送員として各種の日米間の共同訓練に参加する中で、日米両空軍種間の交流事業に貢献したほか、横田及び入間基地で開催される各種大会、行事において卓越した語学能力をもって円滑な支援活動により貢献。 As a loadmaster, he participated in the various bilateral trainings between Koku-Jieitai and USAF. He has also dedicated himself to supporting a variety of events held in Yokota AB and Iruma AB with his outstanding English ability, leading to the promotion of mutual understanding and friendship between two air forces.
	作戦システム運用隊（横田）Yokota	 1等空曹 石塚　哲也 MSgt Tetsuya Ishizuka	航空自衛隊横田基地の発足以来、米空軍施設部隊と緊密に連携しつつ、各種日米共同訓練の積極的な支援活動のほか、全米消防士殉職者追悼行事の広報支援を行うなど、航空自衛隊と米空軍の友好親善及び相互理解の増進に貢献。 He has positively supported the various activities in the bilateral trainings, while working very closely with the 374th Civil Engineer Squadron since the installation of Koku-Jieitai at Yokota AB. He also took a lead in conducting the public affairs activity for "9/11 Tower Run," leading to the promotion of mutual understanding and friendship between two air forces.
	航空気象群（府中）Fuchu	 准空尉　古賀　敦 WO Atsushi Koga	平成29年度以降、各種日米交流行事において、米空軍最先任上級曹長と密接に連携して円滑な運営を支援したほか、横田フロストバイトロードレース、スペシャルオリンピックスなどのボランティア活動に貢献。 He has proactively supported the administration of the bilateral events with the USAF Command Chief Mater Sergeant at Yokota AB since his assignment in 2017. Furthermore, he has dedicated himself to the volunteer activities for "Frostbite Road Race" and "Special Olympics," leading to the promotion of mutual understanding and friendship between two air forces.
	那覇救難隊（那覇）Naha	 空曹長　松山　寿 CMSgt Hisashi Matsuyama	航空自衛隊と米空軍との共同訓練に際し日米相互運用性に大きく貢献するとともに日米女子会を企画開催するなど、航空自衛隊と米空軍との友好親善および相互理解の増進に献身的に尽力。 He has upgraded the interoperability for both air forces in the bilateral exercises, made a great success in strengthening friendship and deepening the mutual understanding, such as holding "JOSHI-KAI" or "ladies' day out" for Japan-U.S. WAF members.
米空軍 USAF	第35戦闘航空団（三沢）Misawa	 Lt Col David C. Dammeier 中佐　デビッド C. ダンマイヤー	第35施設隊隊長として、日米の施設関連プロジェクトの推進や緊急対応処理の施設関連訓練の改善及び航空自衛隊EOD訓練者の知識技術向上に努めるほか、航空自衛隊員や地域住民との昼食会などを主催して日米交流の深化に貢献する等、航空自衛隊と米空軍との友好親善および相互理解の増進に貢献。 As the commander of 35th Civil Engineer Squadron, he has worked in close cooperation with Koku-Jieitai, promoting various civil engineering projects, improving civil engineering practice to address emergency response, and increasing the knowledge and operational skill of Koku-Jieitai personnel. In addition, he hosted the luncheon and party for Koku-Jieitai and local residents to promote mutual friendship.
	第374空輸航空団（横田）Yokota	 MSgt Timothy J.Johnson 曹長 ティモシー J. ジョンソン	空中輸送員として、日米の各種共同訓練演習及び交流事業において遺憾なくその技能を発揮するとともに、空自英語競技会での語学支援、各種の文化交流事業を促進し相互理解を深めるなど貢献。 He has shown his outstanding skills as an experienced loadmaster in various bilateral trainings and events. In addition, he positively supported Koku-Jieitai personnel for the English competition, enhancing the mutual understanding and friendship between two air forces.
	第18航空団（嘉手納）Kadena	 1st Lt Derryk Stiner 中尉　デリク・スタイナー	日米の様々な交流行事等において遺憾なくその技能を発揮し、特に日米防衛会議での相互交流、日米相互幹部グループの発展強化、航空自衛隊英語競技会の審査・指導を行うなど貢献。 He has contributed to Japan-U.S. alliance by conducting a Japan-U.S. defense conference, reinforcing ties of the Bilateral Leadership Officers Group (BLOG), evaluating and instructing at the Koku-Jieitai English competition.

JAAGA空幕部長等講演会
Lecture for JAAGA members on 20 Feb. 2020

2月20日（木）、グランドヒル市ヶ谷「芙蓉の間」において、つばさ会／JAAGA訪米団報告会（1310～1345）及び航空幕僚監部防衛部長南雲憲一郎空将補による「今日の安全保障上の課題と空自の取組」の講演会（1400～1545）が行われ、JAAGA会員67名（正会員46名、個人・団体賛助会員7名、法人賛助会員8社14名）が聴講した。（木村理事記）

【つばさ会／ JAAGA 訪米団報告会 】

荒木淳一 JAAGA 理事から 2019 年度の訪米概要として、齊藤 JAAGA 会長を団長とする 12 名の訪米団が 9 月 9 日（月）に羽田を出発し、ハワイ地区に 3 日間（太平洋空軍（PACAF）司令部、米海軍太平洋ミサイル射場施設（PMRF）、613AOC（Air Operation Center）、ホノルル総領事公邸等を訪問）、コロラドスプリングス地区に 2 日間（北米防空軍（NORAD）、米北方軍(USNORTHCOM)司令部、米宇宙軍(USSPACECOM)司令部、第 50 宇宙団(50th SPACE WING)を訪問）、ワシントン D.C.地区に 5 日間（JAAGA 名誉会員と交流、米空軍協会（AFA）コンファレンスに参加、空軍参謀本部の部長等と意見交換、駐米大使公邸等を訪問）滞在し、20 日（金）に成田に帰国した旨が説明された。

研修の全般成果として、①日米空軍種間の友好親善の更なる促進に寄与するとともに、最新情報を入手し各種事象に対する米側の認識を確認できたこと、②第 11 番目の戦闘コマンドとして新設された USSPACECOM 司令部（JAAGA が初の公式訪問者となった）でレイモンド司令官と旧交を温めるとともに同司令部の最新状況を確認できたこと、③日本に対する信頼と期待の大きさを再確認できたこと、が述べられた。

引き続き、成果の細部及び各訪問先での活動内容が説明された（JAAGA だより第 57 号（令和元年 12 月 23 日）掲載記事「『つばさ会／JAAGA 訪米団』AFA 総会参加等報告」を参照）。

とりわけ、ブラウン大将が「PACAF 司令官として最も重視しているのは、敵対する相手の読み誤り（miscalculation）を防止することであり、そのために戦略的メッセージを適宜発信することに留意している」と述べたこと、PACAF 司令部とは独立して置かれていた 613AOC をブラウン司令官の指示により A3/6 の直接指揮下に置いたこと（空自総隊司令部と同様）、AFA 総会において多くのトップリーダーがスピーチをする中にあって USSPACECOM 司令官レイモンド大将のスピーチは最も関心が高く、一番多くの聴衆が会場を埋め尽くしていたこと、レイモンド大将が「USSPACECOM 司令部における最も重要なチャレンジは、人材の育成（かなり長期的な経歴管理が必要）と戦闘マインドの醸成（民間パイロットを戦闘機パイロットにするくらい大変）である」と述べるとともに、同盟国との連携・協力が重要であるとの自身の日本における経験に基づき「宇宙領域においても、同盟国とのパートナーシップが重要であり、官民の連携も欠かせない」と指摘していたこと、等が紹介された。

また、名誉会員との交流においては、ライト名誉会員に AFA 会長就任を祝してお祝いの品を贈呈したこと、名誉会員代表として毎年ワシントン D.C.で JAAGA 訪米団を歓迎してくださったエバハートご夫妻は令和 2 年 1 月にコロラドスプリングスに引っ越され、今回が最後のエバハート邸での交流行事となったことが披露された。

各訪問先での突っ込んだ意見交換の様子も含め、随所にエピソード等もちりばめられた報告に、聴衆は頷きながら聴き入り、特段の質問は無く、多くの関係者の理解・支援により所要の成果を挙げられ有意義な訪米となったことに対する感謝と、令和 2 年度訪米に対する変わらぬ支援依頼の言葉をもって、報告会は終了した。

（木村理事記）

JAAGA Director Araki makes a report about the study tour of TSUBASA-KAI and JAAGA members to the three areas ; Hawaii, Colorado Springs, and Washington D.C.

【 航空幕僚監部防衛部長講演会 】
「今日の安全保障上の課題と空自の取組」
航空幕僚監部防衛部長 南雲憲一郎空将補

14時から約2時間にわたり、グランドヒル市ヶ谷「芙蓉の間」において、航空幕僚監部防衛部長南雲憲一郎空将補を講師としてJAAGA講演会が開催された。今回新しい防衛計画の大綱（30防衛大綱）が策定されたことを受け、大綱の概要を説明した後、その具現化の方策、問題認識と措置の方向性等について丁寧に説明された。講師は防大33期生で職種は戦闘機パイロットであり、空幕人事教育部厚生課長、6空団司令、中部航空方面隊副司令官を歴任、30年8月より現職にある。（浅井理事記）

Maj Gen Nagumo, Director General, Defense Planning and Policy Department, gives a lecture for JAAGA members

Ⅰ　30 防衛大綱

まず、我が国を取り巻く安全保障環境として、国際社会のパワーバランスの変化や宇宙、サイバー及び電磁波という新たな領域利用そして少子高齢化と厳しい財政状況を説明した。

次に、我が国の防衛の基本方針の目的、防衛の目標及び目標を達成するための手段について触れた後、領域横断作戦に必要な能力の強化における優先事項として、宇宙、サイバー及び電磁波の新領域における能力の獲得、強化に加え、従来の領域（海空、スタンド・オフ防衛、総合ミサイル防空等）における能力の強化について、持続的かつ強靭性を強化する必要があると説明した。また、防衛力の中心的な構成要素の強化における優先事項として、人的基盤の強化、装備体系の見直し、技術基盤の強化などを挙げるとともに、そのアプローチとして、従来の延長線上ではない真に実効的な防衛力、すなわち領域を横断的に連携させた新たな防衛力（多次元統合防衛力）の構築を、従来とは抜本的に異なる速度で変革するとともに、徹底した合理化が必要であると強調した。

Ⅱ　30 防衛大綱を具現化するために

抑止、対処のための防衛力の強化にあたり、優先事項である新領域に係る能力獲得・強化と従来領域の深化を、「新たな機能」、「新たな領域」及び「新たな地域」に区分して説明し、新たに本来任務と明記された望ましい安全保障環境の創出も併せて説明するとして、具体的な内容に移った。

Ⅲ　「新たな機能」、「新たな領域」及び「新たな地域」

急成長する周辺国の航空戦力に対応するため、「**新たな機能**」の獲得は必要不可欠としたうえで、スタンド・オフ・ミサイルや射程延伸した空対艦誘導弾の導入により脅威圏外から運用できるスタンド・オフ防衛能力と、運用基盤の少ないわが国で航空作戦を粘り強く展開するための 42 機の短距離離陸・垂直着陸（STOVL）機（F-35B）の導入が紹介された。

「**新たな領域**」への対応として、まず宇宙を挙げ、令和 2 年度に宇宙作戦隊を新設し、宇宙特技を新設すること、令和 4 年度には宇宙状況把握（SSA）部隊を新設し、必要なシステムを整備すること、更に宇宙設置型光学望遠鏡や SSA レーザー測距装置を導入することについて説明した。

次にサイバーを挙げ、指揮システムや JADGE の抗たん性向上及び政府と一体となった連携によるリスクや対応策の把握の必要性を説明するとともに、人材確保の難しさが述べられた。

最後に、電磁波に触れ、電波情報収集機や地上電波測定装置の整備に加え、電子戦能力の高い F-35 導入と F-15 の能力向上について説明した。

「**新たな地域**」への対応としては、太平洋側の広大な空域を含む我が国周辺空域の常時継続的な警戒監視、防空等の態勢を保持しつつ、STOVL 機を含む戦闘機体系

JAAGA audience are listening carefully to his impassioned lecture

の構築等により、空における対処能力を強化することとし、その際、現有の艦艇からの STOVL 機の運用を可能とすることが必要であることに触れた。これらに必要な施策として、E-2D の取得、移動式警戒管制レーダーの運用基盤の整備、空中給油・輸送部隊の増強、F-35B の取得及びヘリコプター搭載護衛艦（いずも型）の改修が紹介された。

Ⅳ　問題認識と措置の方向性

問題認識①として、限られた資源（人・金）で新領域に係る能力獲得と従来領域における深化を成し得る体制が必要とし、空自全体を俯瞰したうえで全体最適化を図り、隊務運営を根本から見直して進化する必要性を強調した。

問題認識②を、人口減少と少子高齢化等とし、人材の確保はもとより業務等の効率化・合理化、装備体系の見直し及び民間力、部外力等の活用について説明した。

Ⅴ　望ましい安全保障環境の創出のための取組

望ましい安全保障環境の創出のための取組は防衛省・自衛隊の任務の一つであるとして、自由で開かれたインド太平洋において法の支配、航行の自由等の普及・定着と平和と安定の確保が重要とし、関係国との関係の強化並びに他省庁及び米空軍等との連携の強化を説明した。

また、最近の取り組みの一例として、いくつかの実例が挙げられた。米軍等との協力としては、米戦略軍主催の SSA 多国間机上演習（グローバル・センチネル 2019）に英・加・豪・仏・独・伊・西・韓と共に参加したこと、インド太平洋地域における協力としては、ASEAN 加盟国との協力が 2 例紹介された。1 例目は、ASEAN 各国の空軍士官等参加のプロフェッショナル・エアマンシップ・プログラムを東京等で開催したこと、2 例目は、ミャンマー空軍との協力（航空気象）を通して信頼関係を強化したことである。加えて、千歳基地等で豪空軍 F/A-18 の参加を得て実施した日豪共同訓練（武士道ガーディアン）、インドで C-130 をもって実施した日印共同訓練（シンユウ・マイトゥリ）、U-4 のパラオ／ミクロネシア訪問、毎年恒例のクリスマス・ドロップ及び空幕長の英・仏・伊公式訪問が紹介された。

【質疑応答】

Q1：米国では宇宙軍は空軍とは別組織と承知しているが、日本では宇宙は航空自衛隊が担任するとの理解でよいか？

A1：米国では新しく宇宙統合軍が編成された。宇宙統合軍に兵力を提供する宇宙軍はまだ編成されていない。日本は空自に宇宙に関する専門部隊を持つと示された。

Q2：F-35B が「いずも」を利用することがあるのか。

A2：「いずも型」を改修するのは海自であり、改修された「いずも型」から離発着するのが空自になる。

Q3： F-35B は 42 機を整備していくとのことであるが、何年くらい先に運用を開始できるのか？

A3：運用開始は、今後の調達状況による。

Q4：太平洋側の広大な空域を含む我が国周辺空域の常時継続的な警戒監視をするとのことだが、いつどのような事が発端か？また範囲と密度はどうか？

A4：今までも議論してきたが、30 防衛大綱に明記された。発端は周辺国空海軍の行動範囲の拡大である。範囲等は周辺国空海軍の行動に対応することとなる。

Q5：中国の国防予算は、公表されているだけで日本の 3 倍。例えば 15 年後日本の努力は結実するのか？

A5：まず我が国の努力はもちろんだが、日米同盟の強化、関係各国との連携の強化を図ることが絶対必要。

Q6：弾道ミサイル、クルーズミサイル、ドローンに対し、どのように対処するのか？

A6：総合ミサイル防空で対処するべく検討している。

Q7：F-35 について A 型と B 型の機数はどのような考え方か？

A7：戦闘力と運用の柔軟性をトータルで考えたものである。

Q8：将来に向けて人材育成の重要性が増すと思うが、どのような対策を行うのか？

A8：様々な検討を経て結論を得ている部分もある。種々改革することとなる。

Q9：無人機整備の現状は？

A9：無人機であるグローバル・ホークは空自が運用するよう準備している。

Q10：可動率確保に必要な維持経費予算の状況はどうか？

A10：様々な課題がある中、可動率を維持できるよう努力している。

Mr. Hirata, JAAGA Vice President, shakes hands with Maj Gen Nagumo for thanks

最後に平田副会長から、「30 防衛大綱に係る施策の体系的にわかりやすい説明」に対する謝辞と共に、空幕防衛部長の職にある講師を労い自愛を祈念する旨、閉めの挨拶がなされ、講演会を終了した。

（浅井理事記）

ブラウン太平洋空軍司令官、次期米空軍参謀総長に指名される

Gen Brown, Commander of PACAF, nominated to be next Air Force Chief of Staff

次期米空軍参謀総長の人事に関し、3 月 2 日付の米空軍ホームページ等で、概要以下のように報じられた。

「3 月 2 日エスパー米国防長官が、米太平洋空軍司令官であるブラウン大将が米空軍の第 22 代空軍参謀総長に指名された旨、発表した。ブラウン大将は、米連邦議会上院の承認を得た後、4 年間の任を終え 6 月 30 日に退役するゴールドフィン現空軍参謀総長の後任者として、かつ初のアフリカ系米国人として、第 22 代空軍参謀総長に就任する予定である。」

ブラウン大将の経歴や人物像を含む詳細な記事は、米空軍ホームページ、太平洋空軍ホームページ等に掲載されている（米空軍ホームページ：https://www.af.mil/News/Article- Display/ Article/ 2099473/ gen- charles- q- brown-nominated-to-be-next-air-force-chief-of-staff/）。

（※6 月 9 日付米空軍ホームページ等によると、同日、米上院で人事が承認された。就任式は 8 月 6 日。）

Gen Charles Q. Brown, Jr.,
Commander of Pacific Air Forces,
has been nominated to serve as the Air Force's
22nd Chief of Staff

JAAGA は重要な活動の一つとして、毎年「つばさ会／JAAGA 訪米団」をハワイ州、ワシントン D.C.等に派遣し、AFA（空軍協会）会議への参加、米空軍要人等との意見交換、研修、名誉会員との懇談等を行い、日米安全保障体制の強化、日米友好の増進に寄与してきた。平成 30 年度及び令和元年度、訪米団がハワイにおいてブラウン大将率いる太平洋空軍司令部を訪問した際、実り多いブリーフィング・意見交換に加え、ブラウン大将自らが夕食会を催してくださり、JAAGA 会長をはじめとする訪米団一行と、揺るぎない信頼関係が築かれている。

このような友好・信頼関係に基づき、齊藤会長からブラウン大将に、空軍参謀総長ノミネートをお祝いするレターを発出した。太平洋空軍司令官の任を終えられた後、太平洋空軍司令官経験者である名誉会員としての JAAGA 入会を要請する予定である。

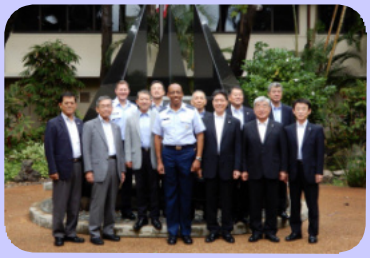
（木村理事記）

（訪米団とブラウン大将の交流の一コマを、以下に JAAGA だより 55 号、57 号から引用する。）

Enjoying private conversations with Gen Brown before dinner

Relaxed faces of Gen Brown and JAAGA members after dinner

Exchanging of views between President Iwasaki and Gen Brown



At the Court Yard of Hero in PACAF facility

55号（2018年）↑

57号（2019年）→

JAAGA members made a courtesy visit to Gen Brown, Commander of PACAF

Gen Brown held a welcome dinner and talked a lot with JAAGA members

Exchanging of views between President Saitoh and Gen Brown based on the meaningful information in the PACAF briefing

特集

米空軍将校 航空自衛隊勤務だより
Letter from USAF Officer Working in Koku-Jieitai

【　通信電子部門　】
航空教育集団第４術科学校
（4th Technical School, Air Training Command）
Maj Chehun Kim

皆さんこんにちは。私は航空自衛隊熊谷基地第４術科学校第１教育部において情報通信教官として勤務しているチェフン・キム少佐です。名前で分かる方もいると思いますが、韓国で生まれ、高校生の時にアメリカのラスベガスに移民しアメリカ人となりました。

職種は Network Operation（ネットワーク運用特技）で、防衛交換要員として熊谷基地に着任しましたが、以前はドイツのラムステイン空軍基地に所在するＮＡＴＯ軍の航空司令部で勤務していました。それ以前は韓国のオサン基地、その前はグアムのアンダーセン基地で勤務し、海外生活を楽しんでいます。実は、私は米空軍に入隊してからずっと日本での勤務を希望していましたが、このように世界を周り日本に転勤が決まったときは本当に嬉しく思いました。高校生のときから日本語を勉強していましたが、このような形で日本での生活ができるとは予想もしていませんでした。

現在の職場では、主として情報通信分野に従事する幹部学生に対する教育を行っていますが、この業務は自分にとって本当に良い経験となっています。私が過去に勉強した内容を再び勉強し学生に対して教えることは、学生に理解させるだけでなく、自分にとっても理解を更に深める良い機会となりました。通信技術に関する教育内容には自信がありましたが、教育する上での知識が不足していた部分もあり、この機会を通じて復習するだけでなく、最新の技術についても学ぶことができました。また、横田基地において米空軍の組織等を教育するための校外訓練を担当しましたが、日程や教育内容等の調整を行うだけでなく米軍関係者と幹部学生たちとをつなぐ役割ができたことを本当に嬉しく思います。

Maj Chehun Kim

教官業務以外でも、様々な演習に通訳者として参加しました。コープ・ノース・グアムを始め、陸上自衛隊のヤマサクラ演習、そしてキーン・エッジにおいて多くの自衛官と米軍関係者の間で会議や調整を支援しました。私の未熟な日本語でも役に立ちたいという気持ちで頑張りました。これらの日米統合演習における二国間協力により効果的に作戦を計画し実行する場を経験でき、本当に勉強になりました。キーン・エッジの演習中、実際に米海軍ヘリの墜落事故が発生した際には、作戦センターにおいて救助活動に関する日米間の調整を行いました。事故にあった全員が無事に生還でき、本当に感謝しています。

熊谷基地は航空自衛隊でも桜で有名な基地であり、毎年実施される桜まつりに、去年は横田基地の米空軍関係者も招待しました。桜まつりや花見については、日本の文化を勉強する際に聞きましたが、実際に参加してみると、とても楽しかったです。

Giving his lesson for students of 4th Technical School

Participants in the Exercise YAMA- SAKURA at Camp Asaka

Hosted USAF Staff to Sakura Festival in Kumagaya AB (Apr. 2019)

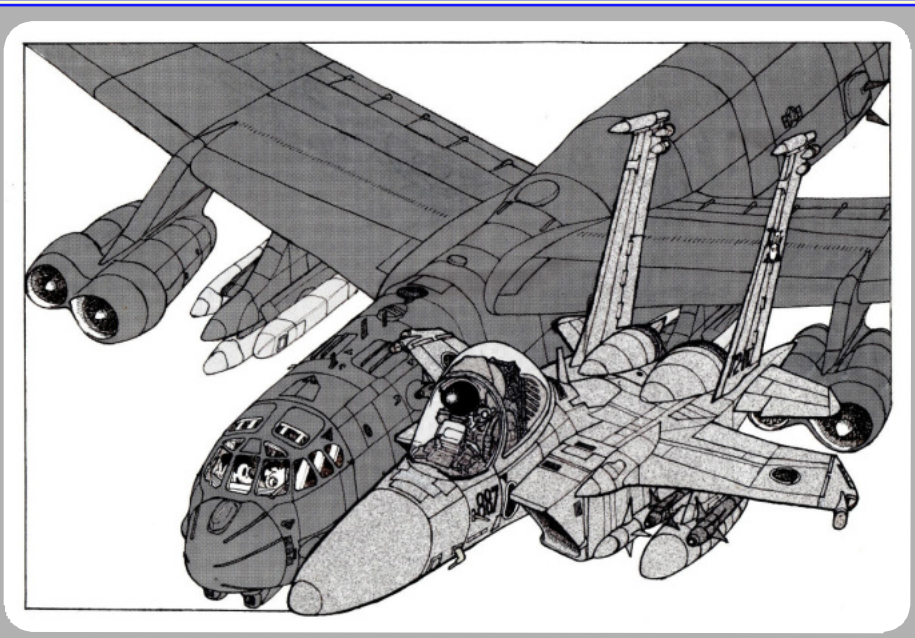
Participated in the All JSDF Iaido Competition (Champion of the Iaido Shodan)

そして、その桜まつりで行われた熊谷基地居合道部の演武を見て衝撃を受けました。とてもカッコイイ！　現在は、居合道部員に誘われ、居合道を基地で練習しています。米空軍ではこのようなクラブ活動がないので、こうした活動ができることは本当に良かったと思っています。練習の成果として見事初段に合格し、自衛隊居合道全国大会では初段の部で優勝することができました。優勝できるなんて、想像もできませんでした。外国人として大会に参加できただけでも嬉しかったのですが、優勝できたことは本当に光栄です。できれば今後も居合道を続けていきたいと思っています。

Climbed Mt. Fuji for the first time (with his coworkers)

他にも、来日して様々な場所を旅行しました。一番記憶に残っているのは、職場の同僚と一緒に夜の富士山に登ったことです。朝日を見るために夜に出発し、暗い道を歩いた経験は素晴らしかったです。眠く、寒さや高山病で大変でしたが、山頂で見た朝日は人生で一番美しい朝日でした！

日本において防衛交換要員という恵まれた職務ができることに感謝しています。このような機会があることを知らなかったし、防衛交換要員として自衛隊の基地で働くことは本当に素晴らしい経験になっています。最後に、私を支援してくれた自衛官と米軍関係者に感謝しています。ありがとうございます。



「B-52 & F-15J」　　作：富岡幹博会員

聖火到着式におけるブルーインパルスの勇姿
Blue Impulse completes mission at the TOKYO 2020 Torch Arrival Ceremony on 20 Mar. 2020

航空自衛隊コーナー from Koku-Jieitai

Aerobatic Exhibitions by Blue Impulse at the TOKYO 2020 Torch Arrival Ceremony on 20 Mar. 2020
（↑）“Leaders Benefit”
（↓）“Olympic Symbol ”
(please watch by heart against strong wind)

3 月 20 日（金）、聖火特別輸送機「TOKYO 2020 号」でギリシャから空輸された「東京 2020 オリンピック聖火」が松島基地に到着し、同基地において聖火到着式が開催された。

聖火リレー用のランタンからオリンピック金メダリストである野村忠宏さん、吉田沙保里さんが聖火皿に点火するタイミングで、ブルーインパルスが 5 色のカラースモークで会場上空に「オリンピック・シンボル」を描いた。

精緻な軌跡で描かれた五輪は、公共交通機関に遅れが出るほどの強風に流され、きれいな形を留めることはなかったが、続く「リーダーズ・ベネフィット」の力強い航跡とともに、行事参加者や復興に力を尽くされている被災地の方々に勇気と希望を与え、その光景は全国にも放映された。

安全性等の検証を経て 20 余年ぶりにカラースモークによる展示飛行が実現したが、各カラー毎に予備機を要するため、要員の確保・練成等、表に出ない苦労もあったと聞く。また、第 1 編隊が「オリンピック・シンボル」を描き、バックアップを主任務とする第 2 編隊が強風に備えて直前に加わった「リーダーズ・ベネフィット」を展示し、12 機のパイロット全員で飛んだそうである。

空幕広報室から写真を提供して頂いた。国家的・歴史的な大役を果たしたブルーインパルスの勇姿をご覧頂きたい。（木村理事記）

All pilots and their training flight

宇宙作戦隊の新編
Space Operations Squadron launched on 18 May 2020

5 月 18 日(月)、航空自衛隊に初の宇宙領域専門部隊である「宇宙作戦隊」が新編され、河野防衛大臣から初代隊長阿式 2 佐に隊旗が授与された。

宇宙作戦隊は、府中基地において約 20 名で編成され、宇宙状況監視システムを運用するなど、宇宙空間の安定的利用の確保に資する活動を実施する予定である。宇宙領域における体制を迅速に構築するため、令和 5 年度からの本格的な宇宙状況監視の運用開始に向けて、宇宙領域における部隊運用の検討、宇宙領域の知見を持つ人材の育成、米国との連携体制の構築などが今後進められる。

なお、JAAGA とも縁がある米宇宙軍司令官レイモンド大将（Gen Raymond, Commander, USSPACECOM）、第 5 空軍司令官シュナイダー中将（Lt Gen Schneider, Commander, 5th Air Force）及び在日米軍司令部（USFJ）から、宇宙作戦隊の新編を歓迎する旨のメッセージが発せられている。

（航空自衛隊ホームページ ：https://www.mod.go.jp/asdf/news/release/2020/0518/を参考に、福永理事記）

米空軍コーナー from 5th Air Force

US, Japan bomber-fighter integration demonstrates dynamic force employment

世界は、新型コロナウィルスのパンデミックによって未曾有の災禍に見舞われている。日本もアメリカも例外ではない。そんな最中にあっても、航空自衛隊も米空軍も日々、有事を想定した訓練に励んでいる。

第 5 空軍広報部から 4 月 22 日に実施された日米共同訓練の様子が公表された。その中から米軍主要部隊指揮官のコメントを紹介する。

なお、本共同訓練は、今年に入って米本土に拠点を置く爆撃機が航空自衛隊と行った訓練としては、2 月 4 日の訓練に続く 2 回目であり、更に 5 月中に 2 回（12 日、27 日）の同種訓練が行われた。（池田理事記）

The B-1B crew received a final mission briefing at Ellsworth AB, 21 Apr. 2020

【ブラウン大将（太平洋空軍司令官兼インド太平洋軍航空構成部隊司令官）】

「この訓練は、地球上のいたるところからの戦略的戦力投入による我々のインド太平洋地域の安全と安定に対する揺るぎない関与の現れである。地球規模のパンデミックという見えない恐怖との対決から軍事的侵略や威圧的行動への対応に至るまで、我々は、自由で開かれたインド太平洋を守るという共通のビジョンに基づく圧倒的、革新的かつ相互運用可能な戦力であり続ける。ACE（Agile Combat Employment：迅速機 敏な戦力展開）の概念の進歩と同様に、同盟国やパートナーとともに統合する様々な兵器システムを如何に配備し使用するかについて、我々はアプローチを刷新し適合させていくのである。B-1 を戦域に投入することによって、いかなる組み合わせの飛行作戦においても 2 国間の相互運用性を確保し、インド太平洋地域において急速に拡大する脅威に、それを上回る速さで我々は備えることができるのだ」

【レイ大将（空軍グローバルストライクコマンド司令官兼米戦略軍空軍戦略・航空司令官）】

「航空戦力の迅速な投入は、国家防衛戦略を直接支えると同時に、米国の国益と同盟国やパートナーを守るため、いつどこに対しても圧倒的な戦力を提供できるという証左である。このミッションは、我々が平和を保証するという約束を完全に守り続けること、そして、たとえ地球規模のパンデミックの状況下であっても地球上の様々な地域から運用する能力を有していることを、地域中の友人達に示すものである」（仮訳）

（https://www.5af.pacaf.af.mil/News/Article-Display/Article/2161370/us-japan-bomber-fighter-integration-demonstrates-dynamic-force-employment/）

B-1B from Ellsworth AB, S.D. and F-16s from Misawa AB, conducted bilateral joint training with Koku-Jieitai F-2s off the coast of Northern Japan, 22 Apr. 2020

投稿

「米空軍の将来動向について（その１）」
－CSBA報告書「米空軍の将来の戦闘空軍力に関する５つの優先事項」を読み解く－

正会員　荒木淳一

本稿は、筆者がJAAGA訪米団の実り多い活動の資とすべく、米空軍の将来動向に関する資料を要約・整理したものである。今回は、筆者が手がけている全3編中の第1弾を紹介することとし、他の2編については次号以降で紹介する予定である。

１　はじめに

昨年９月、つばさ会／JAAGA 訪米団の一員として米国を訪問するという貴重な機会を得た（成果の細部は、JAAGA だより第 57 号を参照されたい）。期間中の米部隊研修、主要コマンドの指揮官・幕僚との意見交換及び米空軍協会主催のシンポジウムへの参加を通じて、米空軍を含む米軍が大きな転換期にあるとの印象を持った。2017 年の政権交代に伴い一連の戦略文書が見直された結果、米国の対中スタンスが、関与政策（「Engagement」）を通じて中国が「責任のあるステークホルダー」となることを期待する融和的なものから、「力による平和」を求め「大国間の競争」に勝利するという厳しい対決姿勢に回帰したことが背景にあったからだ。米国滞在間の意見交換やブリーフィングを通じて、米空軍の将来動向が朧気ながら見えてくるような気もしたが、筆者の英語の聞き取り能力の不足や背景的な知識不足もあり、不明な点が消化不良のまま残ってしまったというのが実態であった。帰国後、少しでも疑問を解消したいとの思いで、関連資料をネット検索していた時に偶然、本報告書に出会った。読み進めるにつれ、自分の疑問が解消してゆくのと同時に米空軍の将来動向に興味を持つ者にとっては意味のある報告書であると考えたのが、本稿を書き始めた理由である。報告書は、「大国間の競争」相手である中露とのハイエンドな戦いを抑止し、勝利する為に米空軍が優先すべき５つの事項を提言している。従来の対中軍事戦略を巡る議論で余り適切に認識されていなかった A2AD 戦略の狙いやハイエンドの戦いにおける適正な彼我の能力評価などがベースとなっており、概ね首肯できる内容となっている。南西域を主体とする我が国の島嶼防衛作戦は、米国の対中軍事作戦の一部でもあると言え、実効的な日米共同の観点からも米空軍の考え方や将来動向を見極めることは極めて重要である。また、本報告書の内容は、30 大綱を受けて「進化」が求められている空自にとっても示唆に富むものであると考える。本稿の目的は、米国の民間シンクタンクである戦略予算評価センター（Center for Strategic Budgetary and Assessments：CSBA）が出した報告書を通して、米空軍の対中軍事作戦の考え方や将来動向を探ると共に空自に対する示唆を考察することである。そのため、まず報告書の要点、キーワード等を各章ごとに紹介し、その上で空自に対する示唆を考察し、まとめとしたい。

２　報告書の概要とキーワード等

（１）概要

ア　本報告書は、ワシントン D.C.に所在する民間シンクタンク CSBA が 2020 年１月に出した 72 ページからなる報告書である。本報告書は、「総括的要約と提言」、各提言の細部を詳しく説明する５つの章並びに結論から構成されている。「総括的要約と提言」並びに各章の中見出しを拾って読むだけで概要を概ね理解できる構成となっている。また各種見積もりの比較や数値見積もりによる分析、概念図の提示など、理解を促進する工夫がなされており、説得力のある報告書となっている。

イ　本報告書は、米空軍が将来に備えるために優先すべき５つの事項を提言しているが、特に興味深い点は、以下の５つである。

まず第一に、2018 国防戦略（National Defense Strategy：2018NDS）を実行するためには、中露の侵攻をほぼ同時に打破できる能力（Forces to defeat Chinese and Russian acts of aggression nearly simultaneously）が必要であるとしていることである。これは中露が武力攻撃に至らない状況(グレーゾーン)で既成事実化を図る戦略を取っており、一方との本格的な紛争の生起は他方の現状変更の試みを誘引する可能性が高いことから、妥

当な考え方と言える。他方で、中露に対処する欧州方面並びにインド・太平洋地域のそれぞれの地理的特性から、統合運用を前提としても空軍力のみが双方へ同時に対応できる能力が必要とされると主張している。その上で、現在の米空軍戦力ではその能力が不足しており、必要とされる戦力規模との間のギャップを早急に埋める必要があると指摘している。

第二に、中露の統合防空網（Integrated Air and Missile Defense： IAMD）の能力評価に基づき、敵の防空エリアに突入するにはステルス性が最低限の要件である一方で、現状ではそれを備えるプラットフォームの数に限りがあり、損耗のリスクがあると共に所要の攻撃効果を上げるのは困難であることを認めていることである。

第三に、中露の A2AD 能力向上により前方展開基地等は脆弱であることから、敵の脅威圏外から戦力を投射・発揮できる能力の向上と同時に戦域内で十分な戦力発揮が出来るよう強靭性を備えた態勢（基地、インフラ、後方補給態勢等）を構築すべきであると提言していることである。これは、米国の対中軍事戦略を巡る議論の中で、日本を含む域内の同盟国が抱いてきた「見捨てられる」懸念を払しょくするものであり、米国の本気度を示すものであると言えよう。

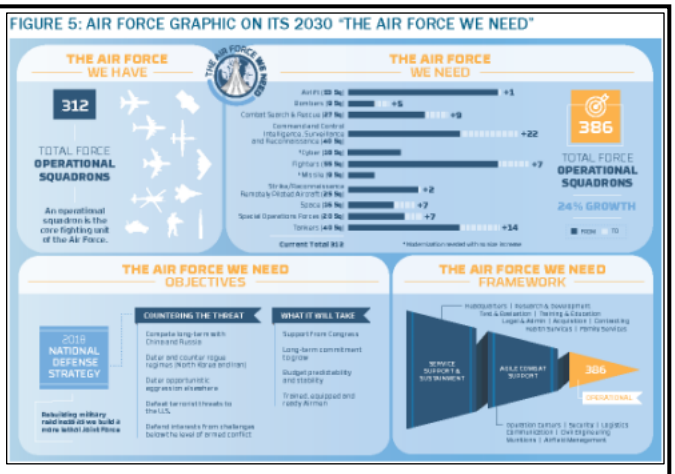
第四に、無人航空システム（Unmanned Aircraft System：UAS）を幅広く任務活用する為、開発を進めるべきとし、低価格で消費可能な UAS の活用を提言していることである。これによって、グレーゾーン事態への対処における実効性の向上及びハイエンドの戦いにおける脆弱性の低減を狙っていることである。

最後に、超音速兵器、燃料効率の高いエンジン（E/G）、戦域管理の為の指揮・統制系統（Command and Control：C2）等を次世代の戦力増幅機能（Force Multiplier）と見做し、それらの開発を加速すべきとしていることである。これは、AWACS や空中給油機等のプラットフォームを戦力増幅機能としていた従来の考え方からの大きな転換であると言えよう。

（2）各章の内容と要点

ア「第 1 章：大国間紛争の為に必要な戦闘空軍力（Combat Air Forces：CAF）の規模」

米国議会の要請に基づき、米空軍、MITRE（米国の非営利団体）、CSBA の三者は、2018NDS 実行の為に必要とされる空軍戦力の規模等を検討した。本報告書では、その比較検討の結果に言及しているが、三者とも現有の米空軍の戦力では 2018NDS 実行には規模が不足しており、増強すべきという点で共通している。米空軍の検討結果は、「我々が必要とする空軍：Air Force We Need：AFWN」として取り纏められ、2030 年までに 386 個飛行隊が必要であるとしている（現有飛行隊数は 316 個飛



行隊）。これは、国防予算削減継続の影響とテロとの戦いでオペレーション・テンポが高い状態の継続により、レディネスの低下と共に戦力規模が歴史的に最低レベルまで低下している米空軍の現状に対する懸念が広く共有されていることを意味している（他の資料に基づく減少規模は、湾岸戦争時(1991 年)との比較で以下の通り。人員：30 %減、航空機数：35 %減、総飛行隊数：23 %減、戦闘機飛行隊数：50 %減）。

一方、増強すべき分野（戦闘機、爆撃機）や増強のペース、新旧プラットフォームの比率等の細部は、三者の主張は微妙に異なるが、報告書中の比較分析表等が参考となる。

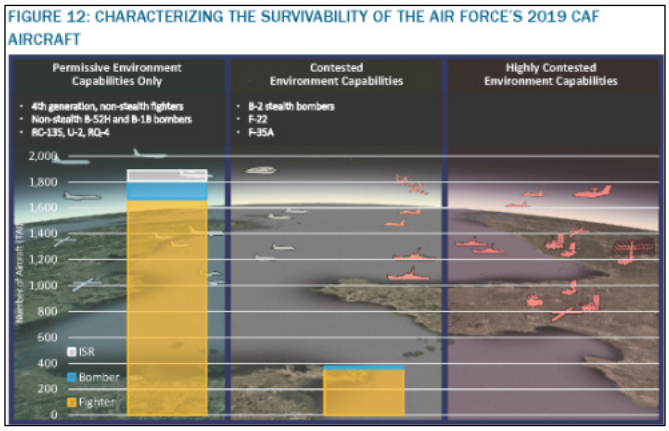
本報告書において CSBA は、戦力組成の比重を戦闘機から爆撃機にシフトさせるべきとしている。それは、紛争初期に脅威の及ばない戦域近傍に多数の戦闘機を集中させて航空優勢を獲得するという湾岸戦争のようなシナリオは A2AD の脅威下では既に成り立たなくなっているという認識からである。また、核のトライアドを適切に担保する爆撃機の組成を維持すると共に、空中給油機への負担を軽減したいという考え方によるものである。

更に、本報告書の注目すべき考え方は、2018NDS 実行のためには、中露の侵攻をほぼ同時に打破できる能力が必要であり、戦域と軍種の特性から空軍力のみがそれを必要とされているという点である。つまり統合作戦が前提であっても、陸軍が欧州方面で、太平洋方面では海軍、海兵隊が主要な役割を果たすが、空軍が両地域で航空・宇宙優勢の維持や重要目標に対する精密攻撃等を行うことが前提なのである。中露共にグレーゾーンにおける既成事実化を狙いとしており、一方との武力紛争生起が他方の行動の誘因とならないようにする観点からも妥当な考え方であろう。

本章のキーワードは「Size & Force Mix（規模と戦力組成）」である。必要な戦力規模を適切に見積もることは容易な作業ではない。またその評価も極めて難しいが、本報告書では米空軍、MITRE、CSBA の見積もりを比較分析しながら最大公約数的な結論、つまり 2018NDS 実行の為には現在の戦力規模（312 個飛行隊）では不足し

ていること、戦力組成が戦闘機に偏っており、A2AD の脅威を踏まえれば適正ではないことを指摘している。

イ「第 2 章：より残存性の高い戦闘空軍力（CAF）の構築」



この章では、中露の兵器システム、特に IAMD システムの発達により米空軍力の優位性が失われ、損耗リスクが増大しているという認識に基づき、生存性を高める様々な方策を取るべきことが提言されている。これは、逆に言うと高性能の IAMD 網で厳重に防護されている地域、目標、つまり敵領域内の目標に対して攻撃することを想定していることでもある。経済的な相互依存関係を重視する政治的判断に配慮し、中国大陸への攻撃を極力表に出さなかった従来の議論では、中国の A2AD 戦略に如何に対抗し、最終的にどう決着させるのかが不明確であった。軍事合理的な検討に基づく本報告書は、より実効的な作戦構想に繋がる考え方である。

中露の空対空の脅威も増大してきており、我の任務達成率が低下すると評価している。つまり第 5 世代戦闘機や長射程 Mx 等の配備が進むと共に敵を混乱させ対抗機動を難しくする実戦的な訓練も行われており、我の高価値・在空アセット（High Value Airborne Asset：HVAA）への脅威が増大していると分析している。IAMD 網の脅威に加えて、空対空の脅威も増大していることから、航空作戦全体の有効性が低下すると懸念している。他方で、脅威圏外から長距離スタンドオフ兵器に依存する戦いも、費用対効果的には不適切であり、最低条件として将来の CAF はステルス性又は低被確認性（Stealth or Low Observability：S/LO）を確保しなければならないとして、次の五つの鍵となる技術を例示している。

①先進の形状設計、②全方位・多周波数帯の反射管理、
③低出力・狭バンド幅の通信、データリンク、
④先進センサー、⑤多次元での相互運用性

地対空、空対空の脅威が増している反面、予算削減やテロとの戦いへの専念の影響により、脅威度の高い地域で作戦出来るステルス性を備えたプラットフォームは少ないのが現状である。従って、短期的には F-35、F-22、近代化された B-2 などの五世代機の調達を最大化すること、中長期的には脅威の高い環境下で敵防空網制圧・破壊（Suppression of Enemy Air Defense/Destruction of Enemy Air Defense：SEAD/DEAD）を実施でき、進入した後の対航空/電子攻撃（Penetrating Counterair/Penetrating Electronic Attack：PCA/PEA）ができる能力を有する航空機や、脅威下でも情報・捜索・偵察機能（Intelligence Surveillance Reconnaissance：ISR）が発揮できる侵攻 ISR 機（Penetrating-ISR:P-ISR）機を開発すべきとしている。

この章のキーワードは「ステルス又は低被確認性（S/LO）」である。高性能な IAMD 網を突破し、戦域内で機能発揮する為には、S/LO が必要条件であるとしている。敢えて S/LO としているのは、防空網に対ステルス機能が付加されてきており、多周波数帯の電磁波の制御が重要になってきているからである。

ウ「第 3 章：前線で戦闘空軍力（CAF）を発揮」

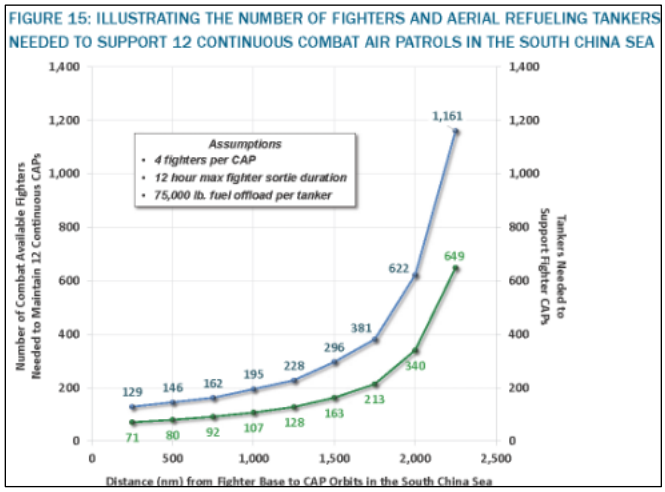
この章では、A2AD の脅威によりヨーロッパと太平洋の両地域における前方展開態勢が脆弱であるという認識に立ち、如何に中露の侵略行為を打破できる圧倒的な戦力を戦域内で発揮するかについての基本的考え方を示している。両地域に所在する米軍基地は、緒戦における弾道ミサイルや巡航ミサイル、無人機による連続攻撃等に対する適切な防御手段を備えておらず、極めて脆弱であると指摘している。この脆弱性は、米国の前方展開態勢の信頼性を低下させるのみならず、同盟国に対する防衛やそれを保証する能力を低下させるもので、戦略的にも重大だとしている。域内の同盟国が抱く「見捨てられる」懸念の原因でもある。

前方展開戦力の大部分を脅威圏外の遠方から再展開するやり方は、飽和攻撃からのリスクを回避できるものの、侵略を抑止し、打破することを困難にするのみならず、正に敵が望む反応であることから、より大胆な行動を誘引する隙を与えてしまうと指摘する。その為、敵の攻撃を受けても所要の戦闘力を発揮できる強靭な前方展開態勢を構築することが不可欠であり、基地を防御し戦力を分散できる能力の向上が重要であるとする。

その上で、戦闘力を前方展開基地から脅威圏外の遠方の基地に再展開することによる作戦遂行上の負の影響を、次のように指摘している。遠距離からの作戦は、距離が増えるにしたがって一日当たり作り出せるソーティ数が減少し、攻撃可能な目標数も減少、他の任務に振り分ける時間も減少する。そして何より一日当たりに必要な空中給油機の数が、幾何級数的に増加する見積もりとなる。

本報告書では、この負の影響をグラフで表しているが、例示された見積もりは衝撃的な事実を示している。仮にオーストラリア北部の基地から約 1,600NM の距離にあ

る南シナ海スプラトリー諸島周辺の 12 個地点に、各戦闘機 1 個編隊（4 機）を連続的に戦闘哨戒（Combat Air Patrol：CAP）させようとした場合、米空軍が保有する全ての F-22、F-15 及び空中給油機を投入しても不可能という見積もりである。つまりほぼ等距離にあるグアム島から尖閣周辺に約 2 個飛行隊規模の戦力すら連続的に投入できないということであり、その倍以上の距離にあるハワイ（約 4100NM）からの航空戦力の投入が如何に困難かも暗示的に示している。



このため、本報告書では前方展開態勢の強靭化、つまり攻撃を受けても粘り強く戦闘域内で戦力発揮できる態勢の構築が第一であるとしている。現在の前方展開態勢は、大きく、集約化され、抗堪化されていない作戦基盤に依存しており、これを小規模で、積極防御と消極防御を組み合わせて強靭性を備える作戦基盤に転換することが求められており、今後の努力の方向性として次の 6 項目を提示している。①脅威の探知、警戒能力の向上(特に巡航ミサイルや無人機に対する)、②分散運用する能力の向上（実施要領の検討、機動力の確保、後方補給態勢の構築）、③戦域内の作戦基盤の増加、④基地の抗堪性の向上（シェルターの整備、多重化）、⑤飛行場の被害復旧能力の向上、⑥IAMD 能力の向上（UAS の活用、指向エネルギー兵器等）。他方で、このような前方の作戦基盤の脆弱性は以前から認識されていたものの、予算上の優先順位が低く、結局整備されてこなかったという事実も指摘されている。

その上で、前方展開基地の IAMD 能力の整備以上に、どの軍種が前方展開基地の整備や防御に責任を有するか明らかすることが重要であるとしている。つまりこの点に関しては米軍内でもコンセンサスが確立されていないことを意味する。弾道ミサイル防衛の責任を米陸軍が有することから、その延長で考えるのか、米空軍が基地防衛に関するフォース・ユーザーとして他軍種の支援を受けるのか、新たな統合作戦構想と十分な予算措置が必要としている。

この章のキーワードは、「Forward & Resilience（前方と強靭性）」である。特に A2AD 脅威下にあっても前方展開地域内で強力な戦闘力を発揮し続ける為には、強靭性が不可欠である。戦力保全の観点から緒戦の飽和攻撃に対して戦力を一旦脅威圏外に引くことが作戦的にも戦略的にも大きなマイナスであることを踏まえて、前方地域で基地等の強靭性を確保しつつ戦力発揮すべきことは、対中軍事戦略における実効性の観点から極めて重要なポイントである。

エ「第 4 章：現在と将来の UAS の戦闘力増幅機能を最大活用」

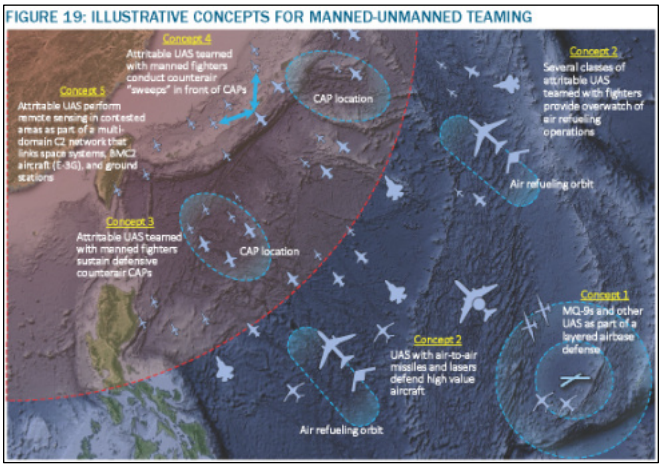
本章では、UAS の利点の最大活用が、CAF の戦力規模のギャップを埋めると共に A2AD への対応に有効であると主張している。予算の制約が厳しい状況下で、新たな調達プログラムへの予算を確保する為、古いとはいえ既存のプラットフォームを退役させることは、只でさえ規模が小さい CAF はリスクを増やすことになる。UAS の任務と役割を再考することが、グレーゾーンへの対応や前方展開態勢の強靭化に寄与できると主張している。非ステルスではあるが長時間滞空型の UAS はより小型の消耗可能（Attritable）な UAS と組み合わせることにより、探知、識別、追跡の機能を発揮しグレーゾーンの侵略行為を初期段階で暴露することが可能であり、「探知による抑止」というグレーゾーン対応で重要な役割を果たすことが出来る。本報告書では、既にポーランドに配備されている MQ-9 が NATO 東側地域のグレーゾーン事態抑止の為に効率的（既存の A/C の 25 %の運用経費、90 %の可動率）に機能していることが指摘されている。

また、MQ-9 クラスの UAS に AESA レーダー（Active Electronically Scanned Array Radar）や ISR 機能、指向エネルギー装置を搭載することにより、遠距離前方で長時間の捜索、探知、一部の要撃を実施できることから、飽和攻撃に対する外縁防御網を構築でき、結果的に前方展開態勢の強靭性向上に寄与できるとする。また、防空作戦時の哨戒任務や HVAA のエスコート（防御）任務が可能な UAS や IRMx、RDRMx 搭載により物理的な破壊力を持つ UAS などは実現可能性が有る上、人員、予算、インフラへの負担は有人機に比べて少ないとその利点を強調している。

更に UAS の活用は人的損耗のリスクを減らしつつ戦闘能力の向上が図れるのみならず、有人機に比して費用対効果の高い消耗可能な UAS を活用することで経費削減に繋がり、結果的に CAF の近代化に寄与できるとしている。現在開発中のバルキリー UAS（Valkyrie）の場合、搭載するセンサーや機能により若干変動するものの、100 機調達を前提とし 1 機当たりの価格は 2 億～ 2.5 億円、維持費用は有人機の 10 %、平時の訓練時間も少な

くて済むとその利点を強調している。また、現在、国防高等研究計画局（Defense Advanced Research Projects Agency：DARPA）が主導する様々な可能性のある UAS プログラムを例示すると共に比較分析している。その上で、消耗可能な UAS の作戦上の優位性として、滑走路や基地インフラへの依存が減り前方展開基地の脆弱性の低減に寄与できること、戦闘域での活動の継続性を向上出来ること、有人機との組み合わせにより作戦能力が向上出来ること等を挙げて、UAS の活用に関する構想を 5 つ示している。

FIGURE 19: ILLUSTRATIVE CONCEPTS FOR MANNED-UNMANNED TEAMING



最後に、UAS の飛行時間当たりの経費（Operational Cost per Flying Hour：OCPFH）が低いことに触れた上で、当面は MQ-9 と他の UAS を活用した基地防御やマルチ・ドメイン指揮・統制（Multi Domain Command & Control：MDC2）支援の為の運用構想を作り上げること、中長期的には有人機と連携できる消耗可能な UAS を調達することを推奨している。

この章のキーワードは、「Attritable UAS（消耗可能な UAS）」である。UAS の可能性を最大限に活かしつつ中露との本格的なハイエンドの紛争において、低価格で消耗可能な UAS は彼のコスト強要戦術に対して有効なカウンターとなり得る。特に有人機との組み合わせを含めて UAS の活用方法について様々なプログラムを推進すべきであるが、鍵はネットワーク化である。

オ「第 5 章：他の将来的な戦闘力増幅機能を開発」

この章では、戦闘能力増幅機能（Force Multiplier：FM）の開発を積極的に進めるべきことを強調しているが、AWACS や KC 等のプラットフォームを念頭に置いた FM ではなく、より費用対効果が高く兵器や E/G などの単体の機能に焦点を当てた FM に言及している。これはプラットフォーム主体の考え方から、個々の機能の統合的効果を目指す考え方への転換が見られる。背景的には、規模拡大や近代化等のように予算的に負担の大きな課題に取り組みつつ、戦闘力の最大発揮を可能とするためには、FM が不可欠という問題認識があるものと考えられる。

中露の IAMD の能力向上により目標到達率が低下することから、単にマスを増やすことでこの挑戦に対応するのではなく、現状では対応困難な速度と RCS コントロールにより生存性と決定力を向上させるべきであるとして極超音速兵器を FM として優先順位を上げるよう提言している。他方で、極超音速兵器は高価であり数的な制約があるとして、多数目標を同時攻撃できる弾薬も追求すべきであるとしている。その中には、高出力電磁波を発出しレーダー等の機能を低下させる巡航ミサイルなども取り上げている。また、現在の CAF の戦力組成が航続距離の比較的短い戦闘機に偏っている等、空中給油機能への依存度が高い現状を踏まえ、行動半径の延伸と任務の持続性を向上させる次世代の可変型 E/G を FM として取り上げている。

更に従来 FM として活躍した AWACS や JSTARS は、大型で数に限りがあり、地上における脆弱性が高くフットプリントが大きいことから生存性の向上が困難であるとしている。これに代わるものとして、プラットフォームではなく C2 と通信、センサー等とパッケージとして組み合わせたシステムとしての先進戦域管理システム（Advanced Battle Management System：ABMS）を FM として推進することで、統合戦力の有効性と強靭性を大きく増加させることが出来るとしている。

この章のキーワードは、「Force Multipliers（戦力増幅機能）」である。この言葉は今までも使用されてきたが、その概念に当てはまる機能は空中給油機や AWACS などでプラットフォームであったが、今回提示されたものは個々の機能や能力であり、全く異なるものである。本報告で取り上げられた FM は、超音速兵器、多目標攻撃機能付き弾薬、先進的可変型 E/G、ABMS(先進的戦域管理機能)などであり、戦力増幅機能（FM）の概念が大きく変化してきている。

3　まとめ

本稿は、CSBA 報告書を通じて米空軍の将来動向を探ることを目的に、同報告書の概要並びに各章の要点、キーワード等を紹介してきた。予算削減の継続とテロとの戦いへの関与による高いオペレーション・テンポ、戦力規模の歴史的落ち込みといった米空軍の現状に対する危機感を踏まえ、中露の A2AD 戦略の狙いの適正な理解と具体的な能力評価に基づいて、今後米空軍として優先すべき 5 つの項目が提言されていることを確認した。各提言の細部は前述のとおりであるが、いずれも中露とのハイエンドの戦いを抑止し、勝利する為には、極めて重要な提言である。特に、中国の A2AD 能力による挑戦に対して、前方展開態勢を強靭化しつつ戦域内で所要の空軍力を発揮し続ける意志を明確にしたこと、並びにその為の方策に言及されていることは極めて重要である。また、

5 つの提言の内容も、今後米空軍に如何に取り込まれていくかをフォローすべき重要なポイントである。

その上で、空自に対するインプリケーションは次のようなものが考えられる。

第一に、米空軍が、前方展開態勢を強靭化し、A2AD 脅威下であっても戦域内で所要の空軍力を発揮することを重視している点である。中国の A2AD に最前線で向き合う我が国にとって西・南西地域の島嶼防衛は我が国防衛であるのみならず、米空軍の戦力発揮を担保する重要な前提条件となるということである。同地域内の自らの作戦基盤の強靭性を向上させるのみならず、日米共同の観点から米空軍の戦力発揮を支える前方展開態勢の構築並びに日米共同態勢の構築に主体的に取り組むべきである。その為には、西・南西地域における作戦基盤の拡大と後方補給態勢を含めた強靭化を統合的観点から着実に進める必要がある。もとより、南西域における過去の歴史や政治状況を踏まえると、使用可能な官民飛行場等を増やすことは容易ではない。しかし、日米の対中航空作戦の鍵であることから、知恵を絞りつつ地道な努力を積み重ねる必要があろう。特に作戦基盤の強靭化に関しては、日米共に必要性を認識しつつも予算上の優先順位から置き去りにされてきた課題であることを念頭に、同じ轍を踏んではならない。

第二に、米空軍が消耗可能な UAS の多様な任務・シナリオでの活用を考えていることである。空自はようやくグローバル・ホークを運用する部隊の建設が始まった段階ではあるが、米空軍の UAS 活用の動向を踏まえ消耗可能な UAS の活用に関する検討を進化させるべきであろう。特に、作戦基盤の強靭化に消耗可能な UAS を活用する考えは、西・南西域の作戦基盤が緒戦の巡航ミサイル、無人機等による飽和攻撃に対して極めて脆弱である現状から、極めて重要である。消耗可能な UAS に多様なセンサーや兵器を搭載し、基地の遠方外縁に探知・防御網を構築すると共に、インフラの抗堪性を高める消極的防御策の着実な実行、被害復旧能力の向上は急務と言える。またその際、米空軍が念頭に置く作戦域内の戦闘管理システム（Battle Management System：BMS）と JADGE との連接を考慮する必要がある。

本報告書は、米国の民間シンクタンクの報告であり、米空軍／国防省がこの通りの施策を採用するか否かは不明であるが、少なくとも軍事合理的に首肯できる内容であり、米空軍の他の関連資料等（米空軍態勢報告（USAF Posture Statement））からも概ねの方向性は共有されていると考える。本報告の提言がどのように米空軍の予算や防衛力整備に反映されるかを注意深くモニターすると共に、我が国としてなすべきことは主体的かつ先行的に実施しなければならない。何故なら、我が国防衛のニーズと米国の対中軍事戦略のニーズが一致しているからである。特に西・南西域における作戦基盤の強靭性を向上させる努力を自ら行うことが、米国の対中航空作戦を支援することにも寄与出来ることを念頭に置く必要がある。またその際「消耗可能な UAS」の活用による基地防空並びに BMSC2 を支援し JADGE との連接を支援する UAS の開発等が極めて重要であると考える。

（了）

投稿募集の御案内

ご愛読の皆様からの投稿は大歓迎です。また、皆様の忌憚のないご意見やご感想も是非お寄せいただきたくお待ちしています。

【連絡先】
（郵便）〒160-0002　東京都新宿区四谷坂町 9 番 7 号
ZEEKS 四谷坂町ビル 3F
日米エアフォース友好協会　広報係
（メール）pubaffair@jaaga.jp

「ビールと枝豆と花火」　　作：宇山佳男OB

米空軍横田基地の行事に参加
JAAGA members participate in several social events in Yokota AB

12月7日(土)　374空輸航空団 オープンハウス（ホリデイレセプション）（Oクラブにて：藤田理事、石川会員参加）

第 374 空輸航空団司令官ジョーンズ大佐が主催するこの招待行事は、横田基地近隣自治体の首長等、横田基地友好 7 クラブの各会長はじめ会員、航空自衛隊横田基地から基地司令等が招待され、華やかな会となった。

開式にあたり鮮やかな赤色のジャケットをまとったジョーンズ大佐が「私の挨拶は短めです。今日はゆっくり楽しんでください」と挨拶、ステージでは PACAF バンドがクリスマスソングを披露し、参加者一同美味しい食事をいただきながらの和やかな会となった。

会の途中で改めてジョーンズ大佐が「多くの皆さんのお力をいただき横田基地と近隣自治体との活発な交流が続けられ良好な関係が築けていることに感謝します」と挨拶された。

JAAGA として、米空軍との更なる関係構築や基地近隣自治体との交流の大切さを改めて実感する会となった。

（藤田理事記）

1月25日(土)　横田基地・7クラブ合同新年会（NCOクラブにて：阪東・藤田・村田理事参加）

この行事の主催者は横田基地と近隣自治体で結成された 7 つの横田交流クラブで、第 374 空輸航空団司令官ジョーンズ大佐以下米軍関係者、7 クラブの各会長以下クラブ関係者などの多くの参加者に加え、来賓として衆議院議員、都議会議員、横田基地近隣自治体の首長、議会議長、警察署長、消防署長、航空自衛隊横田基地司令なども招待され、華やかな会となった。

米軍儀仗隊による国旗入場及び日米国歌斉唱により始まり、華やかな中にも厳粛な空気が漂っていた。本年の 7 クラブ代表は青梅横田交流クラブで、同会の高木会長及び第 374 空輸航空団司令官ジョーンズ大佐による主催者挨拶、青梅市長の来賓挨拶の後、日本式の鏡開きで始まり、会場は更に盛り上がりを見せた。

ステージでは青梅市本町囃子連のお囃子の披露があり、会は和やかに進行した。参加した JAAGA 理事も積極的にテーブルを回り、各クラブの方々との交流を深めた。

今回、参加された皆様から航空自衛隊に対する激励・期待の声もいただき、米空軍及び航空自衛隊を支える組織として、米軍横田基地を支える各友好クラブとの更なる交流の大切さを改めて感じた。

（藤田理事記）

12月13日(金)　5空軍 オープンハウス（ホリデイレセプション）（Oクラブにて：藤田・村田理事参加）

第 5 空軍司令官シュナイダー中将が主催するこの招待行事は、横田基地近隣自治体の首長等、横田基地友好 7 クラブ等の関係者、航空自衛隊の近隣部隊長や各准曹士先任等のほか、海上自衛隊からも新旧海上自衛隊先任伍長が招待され、華やかな会となった。

開式にあたってシュナイダー中将は、日米の防衛交流はもとより横田基地と地域とが築いてきた交流の大切さを述べられた。参加者は和やかなムードの中、お互いの交流等の話題で盛り上がった。

JAAGA からの出席者は下士官出身ということもあり、

クルーゼルニック第 5 空軍最先任上級曹長を囲みながら、軍種の違いを超えた下士官同士の話題でも盛り上がった。

（藤田理事記）

1月25日(土)　スペシャルオリンピックス朝食会（Oクラブにて：阪東・藤田・村田理事参加）

関東地区スペシャルオリンピックス組織委員会主催により開催されたこの行事は、スペシャルオリンピックスの理解をより深めるとともに基地内関係者との相互交流を図ることを目的に開催され、アメリカンスタイルの朝食をいただきながらの和やかな会となった。本年の新会長及び役員の紹介後、昨年の実施概要の紹介及び本年の寄付金の調達状況等が報告された。昨年は横田基地近郊から障害者施設 15 チーム、168 名の選手が参加した。また、1,000 名を超えるボランティアにより円滑に行事が進行したとの報告の際に、特に陸海空自衛隊からのボランティアの存在が大きな力になっているとの紹介があった。航空自衛隊連合准曹会杉本会長を中心とする陸海空自衛隊の准曹士隊員の毎年の献身的な活動に心から敬意を表したい。

行事の途中からは、航空自衛隊横田基地所属の隊員で編成された「よさこいソーランクラブ空蒼会」のメンバーによる「よさこいソーラン」が披露され、行事を更に盛り上げた。

この行事の後、JAAGA として組織委員会との連携を図ってきたところであるが、新型コロナウイルスの感染拡大により本行事は中止となった。行事参加を楽しみにしていた障害者施設の生徒さんや関係者の皆様、そして、この 1 年をかけて準備を進めてきたスペシャルオリンピックス組織委員の方々の落胆は大きいと思われるが、JAAGA としてはこれからも組織委員会をしっかりサポートしていきたい。

（藤田理事記）

JAAGA理事の活動紹介

JAAGA の活動は、役員（P31 に令和２年度のメンバーを掲載）を中心として企画・運営されており、細部については、機能毎に置かれた６つの本部理事（企画、総務、渉外、会員、広報、財務）が具体的に担っています。

だより・ホームページにも掲載している JAAGA 諸活動等に各理事がどのように取り組んでいるのか、今号を皮切りに順次紹介して参ります。　第１回目は、「企画」理事です。

企画理事

今回は、企画理事の職務の一つである「研修の企画、運営に関すること」の事業である「米軍基地等の研修」についてご紹介します。

JAAGA の設立は、平成８年度（1996 年度）ですが、その初年度（平成９年２月）に会員 30 名が米軍（横田、嘉手納）、空自（那覇）基地を研修し、以降、各年度１～２回の研修を計画しています（平成 13 年度は翌年度に実施）。JAAGA は、その発足当初から積極的、継続的に米軍基地等研修を計画、実施してきたところです。

現在では、各年度２回計画しており、第２四半期を基準（10 月第１週となることが多い）に横田基地、第４四半期に嘉手納基地等（空自那覇基地を併せる）又は三沢基地（輪番で隔年）（以下、「嘉手納・三沢基地」）を研修しています。横田基地研修は日帰り、嘉手納・三沢基地研修は空自輸送機を利用した１泊２日（通常、米軍基地内施設に宿泊）で計画します。第４四半期に計画する三沢基地研修では、冬季における三沢周辺の天候による空自輸送機運航への影響、三沢基地内の積雪状況等に毎回気を揉むところです。

研修の準備（会員のみなさんへの案内、受入部隊との調整等）、実施（現地における連絡、調整等）、及びフォローアップ（研修時の写真の配布、参加者の所感文の JAAGA だよりへの掲載等）は、当該研修に同行する５人の理事（企画、渉外、会員、財務及び広報担当）が連携して実施しています。それぞれの理事が有意義かつ円滑な研修となるよう、カウンターパートとの調整に当たります。

特に、準備の段取りとして、会員のみなさんに対する研修の案内を、嘉手納・三沢基地研修は 12 月発行の JAAGA だよりに、横田基地研修は６月発行の JAAGA だよりに同封することから、それぞれの JAAGA だより発送までに日程を確定する必要があり、研修の４か月以上前の段階での日程決定は、研修受入部隊との綿密な調整及び大胆な判断が必要となります。

その日程調整には時間を要することもありますが、研修団に対する受入部隊の接遇は極めて厚く、基地概況説明等は、米軍基地司令官、空自基地司令自らが直接対応され、また、三沢基地では北空司令官の、横田基地では在日米軍司令官、空自総隊司令官の、那覇基地では南西空司令官の講話等を計画していただき、安全保障情勢、部隊の状況、周辺住民との関係等を、現場指揮官の声として直接伺う機会を得ることができます。JAAGA のステイタスに誇りを感じるとともに、担当者としては、誠にありがたく、感謝にたえないところです。

研修に伴い、嘉手納・三沢基地では夕食懇親会、横田基地では昼食会を計画しますが、日米指揮官等の同席（嘉手納基地においては那覇基地所在空自指揮官等も同席）をいただき、大変貴重で有意義な、そして和やかな懇談の場となります。また、その場を更に盛り上げるためには、進行等を務める同行理事の腕の見せ所ともなります。

昨年度第４四半期（令和２年３月）に予定していた米軍嘉手納基地等研修は、諸事情により本年度第１四半期（令和２年５月）に変更しましたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響に配慮し、誠に残念ですが取り止めることといたしました。参加を希望された皆様には大変申し訳ありませんが、事情ご賢察の上、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

現下の状況が改善、終息しました暁には、これまでどおり米軍基地等研修を計画してまいります。JAAGA 会員のみなさまでなければ経験できないこの研修を、担当者一同、心を込めて準備いたしますので、みなさま奮ってご参加ください。お待ちしております。

（平本理事記）

（次ページ下段に、過去の米軍基地等研修時のスナップを掲載）

【企画理事の職務分担】
- 年度事業計画の作成に関すること
- 年度事業報告の作成に関すること
- 研修、懇親、レクリエーション、講話等各種行事の企画、運営に関すること
- 部外への協力、支援に関すること
- 支部との連絡調整に関すること

【企画理事の担当事業】
- 年度事業計画(作成、報告)
- 日米共同訓練(レッドフラッグアラスカ、コープノースグァム)参加隊員の激励等
- 日米隊員の交流活動等激励(特技訓練支援)
- SPORTEX
- 日米要人(米空軍要人、空幕部長)等の講演
- 米軍基地(三沢、横田、嘉手納)等の研修

令和2年度ＪAAGA事業計画

※新型コロナ情勢等により
変更の可能性あり

事業項目／実施時期			1 四	2 四	3 四	4 四
			4 5 6	7 8 9	10 11 12	1 2 3
日米隊員の激励等	日米共同訓練参加隊員の激励等		(レッド・フラッグ・アラスカ演習中止)			
	日米隊員の表彰					
	日米隊員の交流活動等激励					
日本研修の支援等	米空軍軍人の日本文化研修支援					
	米空軍軍人の地域行事等支援	スペシャル・オリンピックス		三沢		
JAAGAと空自・米空軍との交流	SPORTEX '20				A	B
	指揮官交代行事等への出席等					
	米空軍協会総会への参加					
	在日米空軍各基地との連携強化					
	米空軍慶弔への対応					
	関係団体との交流(JANAFA 福生横田友好協会)					
広報及び広報協力	日米要人等の講演					空幕部長等
	米軍基地等の研修			横田		三沢
	日米安保に関する広報活動	JAAGAだより 米空軍広報記事掲載				
	会報「JAAGAだより」の発行・配布					
	一般広報、HP運営、パンフレット作成					
総 会 等			○5/7総会(メールによる) (※当初予定5/13の総会、講演会、懇親会は中止)			
運 営 管 理	会員の拡大					
	支部の活性化等					
	組織基盤の整備等(事務所運営、備品の整備等)					
	会員名簿の作成・配布					
	役員会(★)、理事会(☆)		★ ★ ★	☆ ★	☆ ☆ ★	☆ ☆ ☆
	監査					(R3.4)

米軍基地等研修の一コマ（前ページの企画理事紹介記事関連）

令和 2 年度 JAAGA 役員

※ 青:役職変更、赤:新任

職 名		氏 名	
会 長		齊藤治和	
副 会 長		中島邦祐、 清藤勝則、 谷井修平	
監 事		日吉章夫、 山本祐一	
理 事	理 事 長	福江広明	
	副 理 事 長	上田知元	
	企 画	平本正法、 小野賀三、 平塚弘司、 荒木淳一、 武藤茂樹、 山田真史	
	総 務	前原弘昭、 新谷和也、 大浦弘容、 深瀬尚久、 長田国男、 渡邊博史、 荒木文博、 井上浩秀	
	渉 外	岩本真一、 阪東政詮、 藤田信之、 吉田浩介、 川口泰志郎、 村田圭史、 長島 純	
	会 員	伊藤 哲、 西村弘文、 山倉幸也、 今瀬信之	
	広 報	木村和彦、 福永充史、 池田五十二、 浅井 玲、 太田 徹	
	財 務	内山隆弘、 吉川礼史、 大岩卓弥、 平元和哉、 宮本裕徳	
支部役員	支 部 長	丸山 泰（三沢）	丸野礼治（沖縄）
	支部事務局長	山本親男（三沢）	相原弘介（沖縄）

顧 問	岩崎 茂、 小野田治、 山崎剛美、 平田英俊、 石野次男、 福井正明、 杉山良行、 尾上定正（在米特任）、 四ツ家邦紀（ホームページ担当特任）

JAAGA 役員退任者

職 名	氏 名
顧 問	永岩俊道、 堀 好成、 片岡晴彦
副 会 長	平田英俊、 石野次男、 福井正明
監 事	阿部英彦
理 事	岩成真一
沖縄支部事務局長	木村貞夫

新 入 会 員 紹 介

正会員（Regular Member）

氏 名	住 所	氏 名	住 所
宮本 裕徳	神奈川県横須賀市	野澤 隆一	東京都小金井市
長島 純	東京都世田谷区	竹内 由則	東京都青梅市
橋爪 猛	埼玉県さいたま市	西村 正巳	東京都大田区
丸山 真人	埼玉県ふじみ野市	井上 浩秀	埼玉県ふじみ野市
荒木 文博	東京都小金井市	太田 徹	東京都町田市

個人賛助会員（Individual Associate Member）

氏 名	住 所	氏 名	住 所
清水 義朋	東京都福生市	藤井 誠	東京都多摩市
穂積 金兵衛	愛知県名古屋市	秋山 俊彦	東京都武蔵野市
秋山 由美	東京都武蔵野市		

法人賛助会員（Corporate Associate Member）

会 社 名	住 所	代 表 者
（株）エクシオテック	東京都大田区	作山 裕樹

会　員　募　集

○今期は、関係各位のご努力で、新たに正会員 10 名、個人賛助会員 5 名、法人賛助会員 1 社の合計 16 名（社）の入会を得ることができました。
○2.5.15 現在、正会員数 255 名、個人賛助会員数 95 名、団体賛助会員数 2 団体、法人賛助会員数 37 社となっております。
○今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。
なお、本会への入会につきましては、次のとおりです。
推薦若しくは情報提供を頂いた方には、直接会員担当理事から連絡させて頂きます。

【入会資格】
正　会　員 ： 航空自衛隊の OB
賛 助 会 員 ： 航空自衛隊の OB 以外の方。正会員 3 名の推薦が必要です。
【連絡先】
郵　便　：　〒 160-0002
東京都新宿区四谷坂町 9-7　ZEEKS 四谷坂町ビル 3F
日米エアフォース友好協会　会員係
メール ：　membership@jaaga.jp

【編　集　後　記】

◇新型コロナウイルスの感染拡大によって、世界は大きく変わり、新たな生活様式への移行を含め、私たちの生活は更なる変革を余儀なくされています。このような中にあって、航空自衛隊、米空軍は日々、平和と安全確保のため自らの安全も確保しつつ任務に邁進しており、そのような現役の皆さんを JAAGA だよりを通して応援できることを嬉しく思います。
◇今号では、新たに「空自コーナー」、「米空軍コーナー」、「JAAGA 理事の活動紹介」の欄を設けました。正会員からの投稿も頂戴しました。如何だったでしょうか。また、挿絵は、宇山佳男 OB から夏の風物詩として「ビールと枝豆と花火」、富岡幹博会員から「B-52 & F-15J」、山本康正 OB から「日々笑進」のテレワーク風景を寄稿して頂きました。大変な状況の中、ありがとうございました。
◇だより発行に向けて通常は数回の編集会議を行い議論を尽くすところ、現下の情勢に鑑み、今号は全てテレワークで、新型コロナなんぞに負けるか！という気持ちで取り組みました。以下、編集者の感想を紹介します。
◇CN20 参加隊員の皆さんの所感文からは、訓練に対する真摯な姿勢と成長の軌跡が伺え、とても頼もしく思いました。聖火到着式におけるブルーインパルスの隠れたプロ意識に、感激しながら記事を書きました。そして、5 月 29 日の東京都心上空での「医療従事者等への敬意、感謝」の爽やかな飛行、見事でした。　(K)
◇日米相互特技訓練の記事を担当しました。空自准曹士隊員と米空軍下士官の友好と相互理解に JAAGA だよりが少しでもお役に立てると嬉しいです。　(F)
◇「米空軍コーナー」を担当して、新型コロナ禍にあっても淡々と有事に備える日米軍人魂に感動し、非常に逞しく思いました。しかし、屈強な米軍人が普段着けない大きなマスクでディスタンスを取ってミッションブリーフィングをしている姿は、それとは対照的に新型コロナとの戦いが、いかに細心の心構えが必要かということを物語っています。我々も細心の注意と思いやりを持っていきましょう。　(I)
◇「航空幕僚監部防衛部長講演会」を担当して、30 防衛大綱を具現化するための航空自衛隊の今後の取り組みの大変さを痛感しました。2 時間の講演会のうち 1 時間しか説明にあてず、残り時間をすべて質疑応答にあてた南雲防衛部長の勇気ある行動に敬服するとともに、この勇気できっとやり遂げてくれると大いに期待させられました。　(A)

作：山本康正OB

編集担当（広報理事）：木村和彦、福永充史、池田五十二、浅井玲
（次号から、太田徹新理事が加わります）
JAAGA だよりは、JAAGA ホームページからもご覧頂けます（創刊号から第 49 号までは、「20 年の歩み」に掲載）。